

栄村プログラム
—レポート報告集—



京都精華大学 人文学部
2006年度「国内現地研究ⅡB」

—目次—

生活から生まれるコミュニケーション	酒井 春奈 … 2
人間の住むべき場所—栄村	櫻井 拓也 … 5
栄村の自然から見る伝統と食	詫間 友香 … 11
旬・そしてコミュニケーション	田中 美奈子 … 15
栄村日記	西原 いづみ … 19
栄村論考	山本 耕平 … 23
自然と伝統が残る村—栄村	吉田 晃子 … 32
長野県民から見た栄村	本林 和佳奈 … 38
『村』との出会い	宮部 結 … 44
マタギからみる栄村の暮らしと継承	松井 麻友美 … 49
栄村を訪問して	瀧川 奈緒 … 52
都会ではないところ、都会にはないもの	佐藤 友美 … 56
内発的发展	石川 寛 … 60
心が豊かになる栄村	東 酉岐子 … 65
栄村というところ	野村 聖 … 68
気分と視線が上がる村	諸星 隆史 … 72

※各レポート本文の筆者氏名の前に記されている学籍番号内の「K」は環境社会学科、「G」は社会メディア学科、「WK」は環境社会学科編入、を意味するものです。

例：205K044—2005年度入学の環境社会学科

生活から生まれるコミュニケーション

205K044 酒井 春奈

1. 「おばあちゃんちのある田舎」

高速道路を降りてしばらく走ると、目に入る緑の量が増えてきた。京都から乗ってきたバスは栄村に入った。そこで感じた雰囲気は、「おばあちゃんちのある田舎」ってこんな感じかなあ、というものだった。山があり、川があり、田んぼがあり、家がある。「なんだ、それだけか」と言われてしまえばそうなのかもしれないし、あまり物珍しいものではないのかもしれない。でも、私にとってこの風景は「おばあちゃんち」の風景なので、私が年に数回訪れるだけの場所でしか平素見ることのできない風景なのだ。

しかし私が「おばあちゃんち」を訪れた時と、今回栄村を訪れた時には違いがあった。見ず知らずの地元の人と接する機会が多かったからだ。普段、「田舎」になんとか旅行として行くだけでは、あまり地元の人と話す機会などなかった。ところが今回は、あんぼ作りや交流会などさまざまな機会があった。このレポートでは、その時に考えていたことを書こうと思う。

2. 悪戦苦闘

私は栄村で郷土食・あんぼ作りに参加した。あんぼ作りの場所に行くと、すでに竹の子の会の方々が大きな木のたらいを前に粉をこねはじめていた。その粉というのはコシヒカリを粉にしたものだった。昔はくず米を粉にしたものを使っていたそうで、味も今ほどおいしいものではなかったらしい。竹の子の会の方々はその粉に熱湯をかけ、水に手をつけながらかなり熱そうに粉をこねていらした。粉はみるみるうちに一つの塊になっていった。私もこねさせてもらったのだが、なかなか上手くこねられずべとべとになってしまった。しかし、そのべとべとになった塊も竹の子の会の方の手にかかると、みるみるうちにすべすべの綺麗な球になった。

熱湯でこねた種を手のひらサイズにちぎって蒸し、もう一度つき直してから一つ一つ丸める。一つ分の種をお椀の形にし、くぼんだ部分に、これまた竹の子の会の方々が作ってくれた大根の葉をみそで炒めた具を入れて、肉まんを作るような感じで上にむかってねじりながら具をくるむ。私が最初に作ったあんぼは見事に種が破れ、具がはみでてしまうと

いう、たいへん見栄えの悪いあんぼになってしまった。しかし、コツを教えて貰い、二つめぐらいから次第に要領を得はじめた。最後の方には、なかなか形の良いあんぼが作れるようになった。

3.井戸端会議の場

部屋の中にごさを敷いて、たらいや具の入った入れ物、水の入ったバケツなどをじかに置いて円になって座り、世間話をしながらあんぼを作る（学生は一心不乱に作っていたのだが）。私にとってこの光景はとても懐かしいものだ。私の父方の親戚の家は、年末に餅をつく。私の祖父母もその集まりに参加していて、私も小学生のころは、毎年祖父母に付いて行って、そこの家の子供と遊ぶのが恒例だった。ついた餅を私の祖母が一つ一つちぎり、それを手に粉を付けた大人たちが世間話をしながら丸める。その光景が、あんぼ作りの時のそれと重なった。

あんぼを作る仕事はお母さんの毎朝の仕事だった、と竹の子の会の方が仰っていた。昔のあんぼ作りの光景は今のものとは違うのかもしれない。けれど、郷土食のあんぼを作るということが今の時代に改めて見直され、その場が一つのコミュニケーションの場になっている。そのような井戸端会議のできる場があることで、村の中で横の繋がりが強まると、私は思う。あんぼ作りだけではなく、それぞれが作った野菜などを持ち寄る場もそうだろう。それぞれが生活する中で作ったものが中心となり、人々を繋げているのではないだろうか。

とはいえ、村の方々は元々仲が良いというか、昔からの知り合いのようだった。あんぼ作りの後に、あんぼや竹の子の会の方々が作った野菜などを食べていた時、紙漉きの先生・広瀬さんがふらりと立ち寄られた。広瀬さんは竹の子の会の方の幼なじみだと仰っていた。部屋に入った広瀬さんにもあんぼと野菜が振舞われ、楽しそうに世間話をされている竹の子の会の方々と広瀬さんを見ていて、なんだか自然に笑顔になってしまうような温かい気持ちになった。

交流会のような場以外で、まったく見ず知らずの人間同士での交流もあった。3日目の昼ごはん、秋山で熊ラーメンを食べた時だった。そこのお店の人がきのこをサービスで入れてくれたり、私たちがもんぺの話で盛り上がっていたらもんぺを3枚もくれたりした。初めはお互い、客と店員の関係から抜け出せない感じで時間が過ぎていたのだが、次第に会話が増えてきて（会話のきっかけは「水がおいしいですね」から始まったと思う）、お

店を出るときは「絶対また来よう！」という気持ちになった。また、もんぺを買いに森宮野原駅前のお店に行ったときにも、「これが良いよ」とか「消費税はなしにしとこうか」とか、お店の方からたくさん話しかけてくださって、「買う」「売る」だけの関係性から少し飛び出た感じがあった。

4. コミュニケーションの創造

鈴木敏彦さんと話していたときに、「旅行に行くときには、観光名所を回るだけとかじゃなく、自分の足跡をつけるようにしないと」と言われた。たしかに私はこれまで、どこかに出かけたときは、自分の中だけでその場所を消化していたような気がする。自分と観光地、自分と食べ物、自分と一緒にいった友だちなど、自分の世界の中だけでその場所と接していた気がする。今回、村の人に自分から積極的に話しかけようとする事ができたのは、もしかしたら自分の中で「授業だから」という意識があったのかもしれない。しかし、今度もし栄村に行くことがあるなら、私も栄村のコミュニティーの中で積極的に会話に加わってみたいな、と思う。栄村の中にいる間に、「お客さん」としてだけでなく、小さくとも自分の居場所があったら良いな、と思う。私は栄村で生活しているわけではないけれど、この夏少しだけ栄村で過ごして生まれたコミュニケーションから、新たなコミュニケーションを生み出せるような過ごし方が今後できたらとても素敵なことだ。

人間の住むべき場所—栄村

205G078 櫻井 拓也

栄村の時間はゆっくりと流れている。普段、僕が生活している京都の街では感じることをできない穏やかでのんびりとした時間だ。飯山線の森宮野原駅前には悪趣味なタワーはないし、人間も多くはない。それに村の中に違和感をおぼえるような建物や人工物もなくよかったと思う。僕はそういうモノを発見すると破壊したくなってしまうから。

僕はつねづね、東京みたいなところは人間の住むべき場所ではないと考えてきた。空気は汚いし、水は臭い、人間が多すぎるし、家賃は高い、夜中でも明るいし、すべてが狭い。人間は夜、寝るべきだと思うし、東京にこれっぽっちも魅力を感じない。それでも僕の友だちの多くは東京に行ってしまったのだから、もしかしたらなにかしらの魅力があるのかもしれない。でも、東京にある魅力なんて金を出せば好きなだけ手に入るモノばかりだと、僕は思う。逆に考えると、金がなかったら東京では何もできないし、何も得られないということだ。少なくとも栄村ではそんなことはありえない。それは、栄村の道をちょっと歩くだけでわかる。行き交う人たちは挨拶を交わし、道端には小さな白い花が咲いている。遠くを見れば頑丈そうな山脈が連なり、高い空が広がっている。川には岩魚がいて、山には熊やカモシカがいる。川原を掘れば温泉がわき、水路を流れる水は冷たくてうまい。

「豊かさ」ということは本来こういうことを意味するのではないだろうか。栄村にある自然は生きていた。自然にある動植物や崖や山や川、みんながそれぞれの生を主張していた。また、なにかに遠慮することなく存在する自然となんとかうまくやっっていこうと努力している人間の姿も生き生きとしていた。

今回のプログラムでお世話になった栄村の方々に共通していえることがある。それは皆が村のためにできることを深く考え、それを協力して確実に実行していくという方法を実践しているということである。この「村のために」というところが大切なのである。忙しいなかから時間をつくり、京都から来たわけのわからないような学生を相手に接待をして、一体なんの得があるというのだろうか。僕だったら貴重な時間を費やしてまですることではないと思ってしまう。しかし、それは間違いなのかもしれない。今回参加した16名の学生は一人で生きているわけではない。一人の人間は大勢の人間と関わることで社会の一員として存在できているのである。この人間のつながりによって、栄村の情報はものすごく

多くの人に共有される。もしかしたらそのなかから栄村に移住しようと言い出す人が出てくるかもしれない。移住とまではいかななくても、自分の故郷にもう一度目を向けてみようとする人が出てくるかもしれない。栄村の人たちは「栄村」という媒体をつかって学生に考えるためのきっかけを与えてくれた。問題意識は個人個人違うだろうが、僕にとって今回のプログラムに参加することは、地元から学ぶことのおもしろさや重要性を再認識するための絶好の機会であったと思う。

栄村には村長を筆頭に大変魅力的な人が大勢いた。そういう人達と交流していくうちに、その考え方や情熱のようなものが僕の中で少しずつ共有されていったように感じる。それは何かを与えられて大きく成長するというより、僕という塊から外側の皮を少しずつむいていって、より純粹で素直な部分を出していくような感じだった。プログラム期間中、周りにはつねに学生を温かく迎えてくれる人がいたから、そうなったのかもしれない。このように栄村には、豊かな自然環境よりも豊かかもしれない人間性が存在する。ハードとソフトがバランスを取れていなければ雰囲気の良い状態を保つことはできないだろう。そういう不安定な状態はどこにでも起こりうることで、それをうまく修正していくにも、やはり深く考えることができるような人間など、ソフト面の充実が必要なのだと思う。

プログラム2日目の午後に行われた「水路探索」についての報告も、このレポート内に収録しておきたい。

● 水路探索体験記

8月28日。その日、半袖短パンという格好で水路探索のスタート位置についていたのは僕だけだった。水路については出発前から、「かなり険しい」とか、「道なんて無い」とか、「草深い」という脅し文句を散々聞かされていた。しかし、「どうせ僕を都会育ちの子供だと思って、だまくらかそうとしているんだな」と高をくくっていた。僕は十日町という自然がまだまだ残っている田舎育ちである。であるからして、なんて大げさなことを言う人たちののだろうかと思っていた。

その場に着いて、それは僕のとんでもない誤解であったことを思い知った。道がないのである。夏の強い日差しと、水路を絶え間なく流れる豊かな雪解け水のおかげで草木は成長し、その高さは2メートルを超えていた。自重を支えきれずに互いにもたれあいながら、

それでも上へと伸びようとしていた。それは天然の要塞だった。若干の後悔を悟られないように冷静さを取り繕っていた僕に、生地の厚い丈夫そうなつなぎを着込んだ案内役の広瀬明彦さんはぽつりと、「山をなめてるな」と優しいお言葉をかけてくださった。そして颯爽とその要塞に切り込んでいったのである。こうして僕らの遭難ごっこが始まったのである。

かすかに残る僕が幼い頃の記憶。親に連れられて行った夏祭りの記憶だ。僕は小さく、周りを見渡しても大人たちの脚が見えるだけ。唯一の頼りは親の後姿だけである。もしも見失ったらどうしようという不安感に支配され、とても祭りの雰囲気を楽しむような余裕はなかったように思う。これに近い感覚が水路探索には存在した。

名目上は「水路探索」だったが、水路をじっくり見学したという感じはしない。たしかに水路は探索隊が進む道なりにつねに存在していたのだが、それに注目しながら歩くことはできなかった（「歩く」という表現よりも、「突き進む」とか「分け入る」とか「一進一退」という言葉の方が適切かもしれない）。したがって、じっくりと水路を見ることができたのは休憩時だけであった。途中で3回の休憩をはさんだはずなので、驚くことに実質3回しか水路を観察していないのである。

先頭に行く切り込み隊長の広瀬明彦さんは一体何者だったのだろうか？

彼は僕たちにはない「第六の感覚」で草木の生い茂るまっさらな大地にいと簡単に道をつくり出した。彼は水路に引かかった落ち葉をフォークのオバケみたいな道具で取り除きながら、険しい道をずんずん進んでいった。

彼はちょくちょく小ネタを挟み込んできた。「これがなんとかというもので秋には真っ赤に紅葉するんだよ」とか、「これがなんとかという植物で変わった香りがして、箸として使えるんだよ」とか、「これがうるしだよ」と。

山に慣れているということはこういうことなのだろう。それに比べ、探索隊は目の前のごとを処理するだけで精一杯であった。「とにかく前の人を見失わないように」ということだけに全神経を注いでいた。

水路探索はたしかに辛かった。しかし、探索隊が歩いた距離は水路全体のほんの一部に過ぎないのである。水路を造った人びとの苦労を想像すると恐ろしい。

2回目の休憩はすこし開けた場所とった。教えてもらうまでわからなかったのだが、そこは耕作されなくなった古い田んぼの跡地だった。僕はそこが田んぼとして利用されていた時の姿を想像してみたが、うまくいかなかった。これが水路の険しさを端的にあらわして

いるのかもしれない。想像できないほどの険しさである。

水がほしいから水路を造った。誰も造ってくれなかったから自分たちで造った。そうしなければ村の生活は危機的状況から抜け出せなかったのだ。村の人たちは協力し、人力で水路とため池（野々海）を造った。そして結果としてそれはいま現在でも多くの人びとに大切に利用されている。水路を造る過程でさまざまなことが起きたはずだ。どこかのじいさんが石をどかさうと踏ん張ったら足を滑らせて崖から転落し、大けがをしたかもしれない。若い男女が協力して水路を造っていくうちに恋をし、弁当を一緒に食べたり、相手のことを気遣ったりしていくうちに結婚し、その二人の間に生まれた子供がいま、その水路の整備をしているかもしれない。水路造りをしながら、その日の夕食に食べる山菜を取っていた人がいたかもしれない。このように水路からは想像がふくらむ。

水路と村の生活は密接に関わっている。人と人を水路が結びつける働きは、いつの時代においても変わらないのである。それは水路探索隊にもいえることで、行きと帰りでは学生同士、学生と教員、学生と案内人、案内人と教員の間に漂う雰囲気は確実に温かく親密なものになっていた。

こうして水路探索は多くのすり傷、切り傷、虫刺されなどのお土産つきで終了した。

● 岩魚釣り見学記

水路探索隊の先頭、切り込み隊長・広瀬明彦さんは釣り名人である。そんな話を水路探索の後に聞いた僕は、即座に疑惑の目を彼にむけた。「名人」という肩書きが胡散臭い。自分の目で確かめなくてはいけないと考え、彼の後ろにくっついて、岩魚釣りを見学することにした。

エサはイナゴ。岩魚などの川魚と聞くと水中にいる虫の幼生だけを食べていると考えがちだが、実際は魚の住む場所の環境によって特徴があるらしい。このとき行ったポイントは川の周囲に草が生い茂っている所で、バッタなどの昆虫が多いので岩魚たちはそちらの方が好みだということだった。それぞれの場所の特性に合わせて釣りの仕掛けを作るのがコツである、と明彦さんは教えてくれた。

イナゴ一匹を針に付け、沢を上流から下流に下って行く明彦さん。「上流から下って行って魚に気づかれやしないだろうか。ますます怪しいぞ」と、僕は思った。途中大きな流れが僕たちの行く手をさえぎった。僕たちといっても男子学生 3 名のことで、そこに明彦さんは含まれていない。彼はごく自然に進んでゆく。しかし僕たちにはその「道」が見えな

い。ここで 2 人が足止めになった。そして自動的に「名人」の正体を確かめるという使命を僕一人が負うことになった。

難所をやっとのことで越えると、すでに彼は釣りを始めていた。竿をのばし糸を垂らした場所をじっと見つめるその姿から、とくに何かを感じるということはないが、静かにしているべきだなと肌で感じた。

そして次の瞬間、岩魚はあっけなく釣れてしまった。

岩魚は釣れた。しかし、なぜだか僕は大きな驚きだとか感動を感じなかった。ただ、川には本当に魚がいるのだなと理解しただけだった。それまでさまざまなメディアから川釣りの情報は入ってきていたが、釣れた魚を自分の目で見て、触ったことはこれが初めてだった。釣れた岩魚は小さかったが、しっかりと生臭く、たしかに本物の岩魚だった。針を深くまで飲み込んでいたのでなかなか外せず、いじくっているうちに喉の奥から血を出して徐々に弱っていった。生きていて、死ぬことについて考えさせられる場面でもあった。

場所を変えて釣りは続行された。初めは紹介としての釣りをしていた明彦さんだったが、徐々に自分の世界へと入り込んでいってしまった気がする。口数も少しずつ減っていった。しかし、そこにあった静けさは心地のよいものであった。川の流れる音、カナカナゼミの鳴く音、草木を踏む乾いた音。きっと自然の中に無音の状況は存在しないのだろう。釣りの一番の魅力は余計なことを考えずにいられることだ、と明彦さんは言った。糸や針をじっと見つめていると世の中の嫌なことを全部忘れることができる。そう言われた僕たちは「……」と、時が過ぎるのを味わった。経験してわかったことは、この「……」というのは一人で味わう方がよいということである。4人の男がそろって黙り込んで一点を見つめているという図は傍から見るとかなり危ない香りがする。なにか黒魔術の儀式をしているようにも見えるし、すけべな感じもする。無心でいることがいかに難しいかをここでは知ったのである。

結局はじめの 1 匹だけしか岩魚は釣れなかったが、もう僕は十分満足していた。それは水路探索隊共通の思いだった。「早く温泉につかってサッパリしたい」。こうして岩魚釣り見学は幕をおろした。

●まとめとして

じつは、以前僕は栄村（卓球の大会で栄中学校）に来たことがある。しかし、そのときの

栄村と今回の栄村では印象がまったく違う。なにが違うのか？ それはきっと「まなざし」の存在だろう。今回のプログラムでは、栄村を自分の中で「まなざす」対象として捉えた。そのおかげで以前には気がつかなかった、村に存在するたくさんの「豊かさ」を五感で味わうことができたのである。

身近にありすぎて気がつかないようなことに注目し、深く掘り下げていくという、学問をするうえで最も大切なことを今回のプログラムを通じて再確認できたと思う。

プログラムを通してお世話になった栄村の方々、コーディネーターの鈴木敏彦さん、精華の学生・教員に感謝してこのレポートを終えることにしたい。どうもありがとう。そして今後もよろしくおねがいします。

栄村の自然から見る伝統と食

205K063 詫間 友香

自然に囲まれ、冬には豪雪地帯になるというほどの栄村には、人のぬくもりと自然からの美味しい恵みがあった。自然の中での生活や文化を知ることができた。このレポートでは、村の中で学んだことや風景・土地柄を見て感じたこと、考えたことについてまとめてみたい。

1. 「懐かしい」村を訪れて

栄村を訪れたとき、一番に感じたことは山が近いということだった。目の前に山があり、木も生い茂っていた。また、山を切り開いた土地らしく、坂が多いとも思った。自然が近くにある農村ということで、おいしい野菜や食物をたくさん食べられた。京都とは気温も違うので、涼しさが心地良く、空気が澄んでいるように感じた。

この土地を私は「懐かしい」と感じた。田舎を想像させる景観であったこともあるが、私は田舎で暮らしたことはない。しかし、「懐かしい」と感じるのは、一番に自然と手が触れ合えたことにあると思う。触れ合えたというのには、宿舎に虫がたくさんいたこと、山を歩いたこと、新鮮な野菜を食べられたことなどがある。

「懐かしい」とは、どこから来る思いなのだろうと考えてみると、小さい頃に無邪気に自然の中で遊んだことが関わっているのではないかと思う。自然とかかわるといってもたいたことではなく、虫を追いかけてみたり、土をほじって遊んだり、石や葉っぱを集めるだけの行動である。小さい頃には、誰しも自然のものに興味をそそられるということがあっただろう。そういう目の前で小さな世界として遊んでいた風景が、栄村のような農村の風景にはあるのだろうと思う。そういうことが「懐かしい」につながるのではないだろうか、と私は考える。また、かつて父の田舎を訪れたときに感じた静けさを思い出したことも「懐かしい」という感じにつながったのだろう。子どもの頃にはよく行ったが、最近はずっと行ってない。栄村を「久しぶりの田舎」だと感じたのかもしれない。

2. 郷土食「あんぼ」体験とマタギのお話

班別プログラムの一つ目で、私は「あんぼ」作りに挑戦した。教えてくださった方は「竹

の子の会」という会の人たちで、現在は5人の主婦の人たちで成り立っている。この会は、今から19年前に設立された。ちょうど私が生まれた頃になる。はじめは十数人で始めた会であった。現在は、地元の小学生に作り方を教えたり、東京の方面に売りに行ったりという活動をしている。売りに行くと、数時間で売切れてしまうほどの人気らしい。小学生に教えるのは、やはり伝統として継承して行ってほしいという考えがあつてのようだ。

もう一つのプログラムでは、「マタギの文化」についてお話を聞くというものだった。マタギとは、熊を山で採ってきて熊を全部食べるという主に東北地方に伝わる文化である。話をしてくださった福原さんは、44歳の若さでマタギ文化を継承している人だった。福原さんは父親に影響されて、狩猟免許を取得した。熊狩りは、一人ではやるのではなく、チームワークを大切に作る作業である。ベテランとともに行動し、行動にも決まりがある。場所＝山を熟知していないといけないし、行く前に山の神に祈ったり、獲ってきたものは平等に分けるという決まりがある。このようないろいろな決まりがあり、受け継いでいる形がある点で「伝統」といえるのだと思う。

「あんぼ」と「マタギ文化」の二つに共通することは「伝統の継承する担い手不足」という問題があることだ。あんぼでも、作ってくれるお母さんたちを見ていると手馴れた作業で守ってきた味というものがあるのだろうと思う。同じ味を出すには、長年の経験が要りそうだ。伝統と関わりのないものからしてみれば、ただ「続けてほしい」、「日本らしさを守ってほしい」などということを手勝手に言えるのだろうと思う。しかし、事はそう簡単なことではないように思う。

私の生まれた地域でも、(伝統といえるかわからないが)夏に町内で地蔵盆をやる。町内には一体のお地蔵様がいて、子どもの成長と健康を願う祭りである。この地蔵盆は、もちろん町内でやるものなので、店を出すのは町内に住む大人だ。私は小学生の頃はただ参加するだけだった。しかし、学年があがると、親に交じって祭りの準備を手伝った。地蔵盆をやる時期は8月の終わりで、昼間準備をするので暑くてたまらない。また、店を出すのに、ヨーヨーを膨らませたり、夕立の中テントを張ったり、福引では前日までに膨大な量の景品を用意しなければならない。まさに、自分たちで作るお祭りだ。そのために親たちは何度も会議し、予算は家庭を回って集める。しかし、最近では町内の行事の参加を拒否する人や地蔵盆自体行わないところもある。私の知るところでも伝統的な事が消えてきているのだと感じる。参加するだけだと、ずっとやって欲しいと思うが、作るほうは大変なのである。

ここに、後継者不足の問題もくわわってくると、ますます難しい。その問題は、過疎化が深刻な農村では、とくに言えることだろう。私は、今まで伝統の問題を考えてみたことはなかった。外に目を向けることで自分の町に受け継がれてきた伝統に気づくこともある。自分の町特有の伝統の形を消えてしまわないように守りたいと思い、受け継いでいる人と関わろうとすることが、伝統を継承していくことにつながると思う。続けて行くことが大変だからこそ、守っていく価値があるのだと考えたい。

3. マタギと自然保護の関係

マタギでは自然保護団体からの反対意見や後継者不足などさまざまな問題がある。「自然保護団体からの反対意見」とは、狩りをすることは生態系の破壊だというものである。福原さんの話では、熊を採る量に制限が課せられたが、その結果、村には熊が増え、畑を荒らす姿もあるという。伝統の中で、動物と人間が住みやすい数を保ってきたが、人間の土地開発や人間の「動物を狩るなんてかわいそう」といった外からの意見で、村に特有の人間と自然のバランスを壊してしまっているのではないかと思う。私は、昔から続いた伝統は自然の中で成り立っていて、今のように人間の作ったものだけの循環と違い、自然とずっと付き合っていくような関わり合いができていたのではないかと思う。人間が出すゴミや化学物質のようなもので生態系を壊している今の姿とは違うものがあるだろう。自然と共に生きている土地をこれ以上壊していくことは、伝統自体を日本からなくしていくのではないかと思った。マタギ文化をなくして、自然との関わりを無くしてしまうことは、私たちが生きにくい土地をつくっていくのではないだろうか。

3. 安心・安全な食べ物とは

栄村のような田んぼや畑が多く残っている農村では、自給自足というものに近づけるだろう。あんぼやマタギ文化は、地元のは自分たちで食べるという考えがあるからこそできてきたことであろう。

こういった地元の食を食べるということには、食への安心や安全が関わっていると思う。自分たちが住んでいる土地の土で、自分たちが作ったものを食べるというのはこのうえない安心感があると思う。あんぼ作りのお母さんたちが出してくれた、とうもろこしやトマトが美味しかったのはもちろん、漬物や酢の物といったものは「朝に取れたものだ」と勧められ、たくさん食べた。栄村で食べた美味しい野菜の味を私は覚えておきたい。

現在日本全体を見ると、牛肉問題、海外で作られる低価格な野菜、表示問題などさまざまな食に関する問題があるが、すべては自分たちで作らないようになったから生じている問題である。できれば安全なものを食べたいと思うと、目の届く範囲でできているものもいいと考えるだろう。どんな土地で、誰が作っているのかわかることが望ましいが、日本の国内で作れるという、距離的に近い関係はあり続けて欲しいと願う。自分が行ったことがあったり、知っている土地で作られたものであったらうれしいことだ。私たちは自然があるありがたみを知り、今も残っている土地を守っていきたいと思う。

今回栄村に行ったのは、たった数日で、まだまだ表面的な自然の風景しか見えなかったと思う。しかし、自然はその土地に生きているものであり、そこに生き続けることで守っていくことができるのである。都市の生活が中心になり、食べ物のありがたみが消えてきている今、見直さなければならない農村の風景を感じる事ができた。安全な食の意識が高まっている中で、こういった美味しい食をなくしてはならない。自然や人、食べ物のあたたかみを感じられ、よい経験になったと思える4日間だった。

旬・そしてコミュニケーション

206WK11 田中 美奈子

●はじめに

私が栄村に行く前、栄村に持っていた印象は「豪雪地帯の田舎のまち」というものであった。しかし、今回訪れたのは夏の栄村で、当たり前だが雪など積もってない。それでも今年の消雪が5月10日であったというから驚きだ。雪が降っていない夏の栄村は、景色がとても美しかった。360度どこを見渡しても、絵葉書や写真にそのままありそうな美しさ。木や草や山々の緑はあんなに色鮮やかなものだったんだと再認識するくらい、本当に美しかった。もちろん緑だけじゃなく、空の青、水の透き通った青、実ってきた稲のほのかな黄金色、色とりどりの野菜。私の目がこんなに素晴らしい色を識別することができる目によかったとしみじみ思えるくらい、栄村の景色に感動した。帰ってきて数週間たった今でも理由はわからないのだが、栄村を「田舎まち」だとは感じなかった。それどころか、訪れたのは初めてなのにどこか懐かしさを感じた。その懐かしさが何であったか、未だによくわからない。

●自給自足と旬の関係

栄村に行って驚いたことは、店がないことである。私たちが今回訪れた場所は、栄村のほんの一部にすぎないだろう。でも、それにしてもお店と言う場所がほとんどといていいほど存在しない。私が京都で暮らす際に、店がなかったらまず食料の調達に困る。でも、栄村で暮らしている人たちは店が多く存在しなくても困ることはないのではないだろうか。私には、栄村の人たちは食料の多くを自給しているように見受けられたからである。

まちを見渡すと、そこらじゅうに稲や自家栽培の野菜畑が見られた。2日目の夜や朝ご飯の時に栄村で育てた野菜を口にする機会があった。食べてすぐに「これは自家栽培の野菜だ」ということがわかるくらい甘みがあり、噛めば噛むほど口の中に自然の野菜の甘みが広がった。とくに私が印象に残っているのはかぼちゃだ。甘いというのはもちろん、中身がずっしり詰まっていて、かぼちゃの煮物をひときれ食べただけで軽い満腹感を味わった。私は大学で「はたけ部」というサークルに所属し野菜を育てているので、自家栽培の野菜と、スーパーで売られている大量生産で農薬使用の野菜との味の違いはわかっているつも

りでいる。栄村で食べた野菜は紛れもなく自家栽培の野菜の味がした。それは、食べる前に野菜の形を見ても一目瞭然であった。スーパーで売られているような形がほぼ一定の野菜とは違い、大きさが極端に異なったり、多少傷が入っていたりしているものがあった。このような野菜は自家栽培をしていないかぎりは私たちの手元に届くことはない。

そして、私が今回栄村で食べた野菜はすべて夏野菜だった。当たり前ではないか、といわれるかもしれないが、今、食べ物の旬というものが消えようとしている。スーパーに行けば年中トマトやキュウリを売っている。野菜に旬があるということは「はたけ部」に入って、野菜を育てる過程ではじめて知った。恥ずかしながら、それまで私は野菜に旬があるなど知らずに育った。栄村に行く前に、渡邊加奈子さんと栄村の食事について話す機会があったのだが、渡邊さんが「春だったら山菜づくしで天ぷらとかいっぱい出るだろうけど、今の季節なら野菜かなあ」と言うのにとっても驚いた。「今の季節になぜ野菜なのだろう。野菜なんていつでも食べられるじゃないか」と。でも、実際栄村に行って、出てくる食事は野菜がメインで、ほとんどが旬の野菜だった。なぜ旬とわかったかと言うと、「はたけ部」で春に植えて、夏に収穫していた野菜（なすやかぼちゃなど）がほとんどだったからだ。

旬のものを旬の時期に楽しむ。当たり前のことなのだが、それを当たり前だと気づくことは、旬が消えゆく今の世の中では難しい。自分たちで育てたものを旬の時期に収穫して食べる。ただそれだけのことがどれだけ幸せに感じられるだろう。一所懸命育てて、収穫して、食べる。そうすると、食べる時の喜びは、スーパーなどで買ったものの数倍にも感じられる。野菜を育ててくれた太陽や水といった自然にまで感謝したくなってくる。栄村の人たちはそんな喜びを毎年、季節ごとに味わっているのだ。栄村の人たちは特別だと思わずに生活しているだろう。だけど、自分たちで育て、旬のものを楽しむことがどれだけ幸せで羨ましいことであるか。私は実際に野菜を育てていく過程で、「旬の野菜」を楽しむことを覚えた。だが、土地がなかったり、自分の心や生活に余裕がなかったりで、その楽しみを実感している人は少ないだろう。

トレーサビリティ制度がどんどん普及しているが、栄村にはそんな制度は関係ないだろう。なぜなら、道の駅などに売られている野菜には生産者がきっちり書いてあるし、自分たちで作った野菜であり、普段から「顔の見える関係」が成立しているからだ。

● コミュニケーションのあり方

栄村は、都会からすると何も無いところかもしれない。大きな複合商業施設もなければ、

高く大きく聳え立つビルもない。ボウリング場や漫画喫茶などの娯楽施設もない。テレビだって何チャンネルもうつるわけでもない。それでも、都会にないものがいっぱいある。それは栄村を取り囲む自然であったり、人と人とのコミュニケーションであったり。都会のような娯楽がなくても、木の枝と糸があれば川でテンカラ釣りを楽しむことができる。居酒屋やレストランがなくても、青倉のテントなどに人がどんどん集まり、自分たちで育てた野菜を食べながら、みんなで会話を楽しむ。道を歩けば、すれ違う人とちょっとした会話をする。高度経済成長や都市化が進む中でなくしていったものが、栄村にはたしかにある。私はそう強く感じた。

栄村滞在 4 日目の朝に、朝ごはんを食べる時にはじめてテレビをつけた。それまでの 4 日間、テレビを見る機会がなかったので、とても新鮮な感じがした。でも、その新鮮な感じはすぐに違和感へと変わっていった。ご飯を食べながら皆がテレビ一点を見つめている。会話もなく、ただ黙々とご飯を食べながら視線はテレビに釘付け。その光景がなぜかおかしく感じた。それまでの 4 日間の中で、食事をする時は皆で顔を見合わせ、楽しく会話しながら食事をしていただろうか。なぜか急に現実に戻されたような感覚に陥った。

それまでの 3 日間が現実でなかったわけではない。だが、普段の生活とは違う環境にいて違う体験をすることで非日常の世界にいたことは間違いない。その非日常の世界で私は「情報化社会からおいていかれている」ような気がした。テレビを見ることもなければインターネットをすることもない。情報を得ることがないので、どこか隔離されているのだとか、社会と断絶されているようにも思え、少しだけ不安になった。いかに自分が普段の生活でテレビやインターネットなどに依存しているかを思い知らされた。

でも、栄村での生活に何一つ不自由なことはなかった。テレビやインターネットから情報を得なくても生活に問題も不自由なこともない。むしろ、栄村で皆でテレビに釘付けになっている光景に違和感を覚えるほどであったのだから。

私は、栄村は昔の日本の「まち」のようだと思っている。機械なんかに頼る生活はしない。食べるものは自分たちで作る。水路を管理するために人間が山に入る。伝統工芸が今もまだ残っている。遊びは自然を生かして自分たちで工夫して遊ぶ。そしてなにより、村民が自分の住む「まち」を愛し、自分の住む「まち」をよくしようと奮闘している。そんな栄村と村民を私は心底素敵だと思うし、そんな生活が理想である。そう感じていたために自分の中で「栄村＝何もないところ」と思い込みすぎていたのかもしれない。だからテレビに違和感を覚えたのかもしれない。娯楽がなくても、自分たちで娯楽を見つけ出し、

楽しむ。

栄村の最大の娯楽は人と人とのコミュニケーションだと私は思う。私はもともと人見知り、初対面の人や他人と喋るのは苦手だ。しかし、この栄村プログラムでたくさんの人と接する機会があった。普段話すことがないような人とたくさん会話をした。私はその何気ない会話の中で、たくさんの刺激や新たな発見を得た。テレビやインターネットから得る情報なんかより面白い情報もたくさん得た。たとえば、テレビで「これがおいしい！」と発信されるよりも、人に「これがおいしい！」と発信される方が説得力がある。それと一緒にやはり、顔が見えるコミュニケーションが一番大切で、楽しいものだと再確認した。

● おわりに

私はこの栄村滞在で、さまざまなことを体験した。何もかもが新鮮で楽しく、日々発見、日々勉強の毎日だった。栄村にいたときの私は、きっと毎日笑顔だっただろう。私は栄村の魅力にどっぷりとはまった。それゆえにまた栄村を訪れるだろう。そしてまた、新たな発見をして笑顔で駆け回っている。そんな様子が頭の中に浮かんでいる。

栄村日記

205K082 西原 いづみ

はじめに

8月27日から30日までの4日間、長野県の最北端にある村、「栄村」を訪問した。京都から栄村まではバスで約7時間と長旅であったが、話に聞く栄村が実際はどのような場所であるか、期待が膨らんでいった。

私が栄村に行ってみたいと思ったのは、もともと、里山の生活というものに興味があったということもあるが、今年度の前期で受講していた松尾先生の講義の中で、先生が話す栄村での体験談が私の普段の生活とはかけ離れていたもので、どのような場所であるのか見当がつかなかったためである。そのため、自分の目でどのような所なのか確かめようと思ったのがきっかけである。

27日の夕方4時頃、栄村に着いて初めに飛び込んできたのは、田んぼの間にぽつぽつとある赤や青色の屋根の私の地元ではあまり見ない形の家々と、村の隣を流れる荒々しい川であった。その景色はとても暖かい雰囲気があるものであった。その景色をみた瞬間に、この4日の間に栄村を満喫しようと心に誓った。

1. 季節感のある暮らし

栄村に4日間いて、いろいろなところへ連れて行ってもらい、栄村の皆さんとお話をたくさんして私が感じたのは、栄村が「季節感のある村」ということである。といっても私は今回初めて栄村を訪れたわけで、本当は夏の栄村しか知らない。にもかかわらず、なぜこのように感じたか。村の方々とお話をしていると、雪の話であったり、山菜の話であったりと、季節ごとのお話を多く耳にしたからである。

春なれば山に山菜を採りに行き料理する。秋は稲を刈って新米を食べる。冬になれば大雪が降るため、雪下ろしや雪踏みをする。このような話ができるのは栄村の人びとが自然と共に生活をしている証拠であると感じた。また、栄村の人びとは季節によって違う生活をしているのだとも思った。

こうした話をたくさん聞いていると、私の普段の生活にはほとんど季節感がないことに気づいた。スーパーに行けばある程度季節に関係なく食べものが買えるし、冬になっても積もるほどの雪は降らないので、雪で外に出られなくなるということもない。ある意味で

はこれは住みやすいのかもしれないが、楽しみや喜びも半減しているのではないかと思う。日本の多くの場所では、このように損をしているのではないだろうか。栄村のように日本特有の四季の変化をもっと満喫できれば、楽しみや喜びが増えるのではないかと思った。

2.村の問題を克服する取り組み

1 日目の夜に真太郎さんから栄村についていろいろとお話を聞かせてもらった。現在 31 の集落があること、人口が約 2 千 5 百人であること。また、最高積雪記録が 7.85m であることや、役場から秋山までの道のりが約 30k m もあることなど、驚くような話も聞かせてもらった。

その中で、私が一番気になったのは田直し事業、道直し事業、げたばきヘルパーなどの栄村独自の取り組みであった。げたばきヘルパーについては来る前に聞いたことがあったが、2~3 枚の棚田を一枚にして機械を入れられるようにする田直し事業、道を広くして除雪機が入れるようにする道直し事業については今回はじめて聞いた。村の抱える大雪の問題、高齢化の問題などさまざまな問題を村で解決しようとする取り組みはすばらしいと感じた。

2 日目に行った野々海の話も興味深かった。水の便が悪い地域でも水田を作れるようにと、雪解け水が貯まるため池を作って水がいきわたるようにする大工事だったという。2 日目の午後から行った水路探索では、「水路が木の枝や石や雪でふさがらないように見に行かなくてはならないがそれを 70、80 歳のお年寄りが出来ますか？」という問いかけをされた。

このように問題を考えたり解決したりする取り組みが栄村ではたくさん行われていると感じた。実際、水路探索は草が自分の背丈ほどあって、足場もとても悪かった。あんなところにお年寄りが一人で入って転んで怪我でもしたら誰か助けを呼ぶこともできない。村で生活をしている人だから、村にとって何が大切で、何が問題なのかがよく分かるのだと思った。

3.自然の中での生き方

自然の中での生き方については、1 の「季節感のある暮らし」で述べたところと重なる点が多いのだがとくに 3 日目に訪れた秋山郷でのお話から感じたことである。秋山は秘境ともいわれるだけあって、集落ののどかな感じと山々の迫力が一緒になってとても美しかった。秋になれば紅葉して山肌がさらに美しいという。ぜひ見てみたい。

秋山で驚いたのは人の少なさである。屋敷の民俗資料館の近くを散策しているときにはほとんどといっていいほど人に会わなかった。普段、私の家の近くでは外を歩いていて人と会わないことなどないので、とても妙だった。

自然の中で自然に逆らわずに生活をしていると感じたのは、午後から行った木工の話からである。行くまでは1年中ずっと木工をやっているのかと思っていたが、そうではなく、木工をするのは雪で閉ざされてしまっている冬だけということであった。1年のなかでする仕事が変わることが私にとっては考えられないことであったので、とても驚きであった。しかし、ここではそれが普通で、昔は冬にはワラで草履などを家の中でつくっていたそうである。雪が降る冬には外に出ずに家の中で仕事をする。これが自然の中で自然に逆らわずに生きる生き方だと感じた。

また、栄村で山をバスやトラックで登っているときに、山の中でもあまり暗くなく、遠くの景色がみえることが不思議だった。普通なら山は薄暗く、木が乱雑に生えているため外の景色がちよくちよく見えるものではないと思うのだが、栄村では遠くの景色が良く見えた。山も段々畑にし、木は薪や木材として利用しているからいつもの山の風景とは違うのだと感じた。これが里山というものなのだと感じた。

このように栄村では、人が住んでいる場所に自然があるのではなく、自然のある場所に人が住み、あるときは自然に逆らわずに生活をして、あるときは、自然を利用して生活をしているのだと感じた。

4.まとめ

栄村での4日間は私にとってとても有意義なものであった。そして、栄村にいと、なぜか不思議なことに道ですれ違う村の人に挨拶をしている自分がいた。それはたぶん、村の方々が見知らぬ私たちにもちゃんと挨拶を返してくれる人ばかりであったからだと思う。また、私がそれだけ栄村が好きになっていたということなのかもしれない。

栄村に来たときは栄村を満喫しようと思って来たが、4日間栄村を見てみて、「栄村のいいところは今回一回だけでは満喫できない」ということに気づいた。おそらくまだ10分の1も栄村を知っていないように思う。そのため、これからもちよくちよく栄村を訪れることが出来ればと思っている。やはり、豪雪地域で有名な栄村には冬に訪れないとダメだと多くの人に言われたので、冬には必ず行きたいと思う。また、もうすでに稲刈りに行く約束も「さくら」さんとして、もんぺも買ってきたので、あとは自分の体力をつけて、稲刈り

をして、秋の栄村が満喫できればと思う。

栄村論考

205G175 山本 耕平

はじめに

私が栄村に来て感じた初めの印象は、栄村に来るまでに頭の中でイメージしていたものよりも「普通」というものだったように思う。「普通」と書いたのは、栄村に来るまでに読んだ文献などから、私は「豪雪地帯の田舎」というイメージを強く抱いていたからである。もちろん“秘境”と呼ばれる秋山郷をはじめとして、360度にひろがる景色は圧巻であった。しかし、夏のこの時期に来てみると、珍しさよりも、どこか懐かしさを感じた。

それは、私の地元である三重県青山町（現在は合併し伊賀市となった）も、いわゆる田舎だからである。総面積の80%が山林であり（林業が盛んなため栄村のような広葉樹ではなく針葉樹が多いと思われる）、また、淀川を経て大阪湾に注ぐ木津川の源流も東南に位置する青山高原から発し、鮎やオオサンショウウオが生息する川もある。

それゆえ私の視点は「都会人から見た田舎」ではなく、「田舎人から見た田舎」であったといえる。

今回のプログラムでは、まず栄村を知り、体験するという、あくまでも栄村の上澄みの部分をすくっただけであり、まだまだ栄村についてレポートできるほどの知識を得たわけではない。しかし、私なりに今回の体験から感じたことを、以前から考えていたことと絡めて、いくつか書いていきたいと思う。

1. 魚釣りと栄村の精神構造

私はプログラム3日目に、岩魚溪流釣り体験をすることになった。担当された相沢和薫さんが、車でポイントへ向かう車中で、とても興味深い話をしてくれた。

「テンカラ釣り（注1）と外国から来たフライフィッシング（注2）との違いは、たとえばお客さん（岩魚）をもてなす（釣る）際に、フライフィッシングの場合、コーヒーという飲み物の種類が駄目ならば、コーラ（フライの種

類) に変えて喜んでもらおうとするのに対して、テンカラ釣りは同じ疑似餌を使った釣りであるが、岩魚に気に入ってもらえない(釣れない)場合、フライの種類を変えるのではなく、カゲロウの産卵や溺れた昆虫をさお捌きで演出したりする。つまり、コーヒーが駄目ならばウイナーコーヒーを出してみたり、砂糖を多めに、またミルクを加えてみたりして、釣る努力をするのがテンカラ釣りだ」

これはつまり、もともとあるものの潜在的な良さ・ものを引き出す・応用することに重点をおく意識があるということである(先輩の石川寛さんはこれを「内発的発展」と呼んでいた)。

これは釣りだけに限ったことではなく、栄村が実践しているさまざまな取り組みの形態と一致するのではないだろうか。

米作地帯でありながら、地形の関係上、目の前の千曲川から水田に水をひくことができず、米を自給することができなかつた水内地区の集落。遡ること江戸・文政年間、白鳥地区の月岡又右エ門が個人の私財を投入し野々海高原の9合目に又右エ門堤を築くことに成功し、約15ヘクタールの開田が可能となった。さらに幾度となく野々海開拓を試み、野々海開拓へ尽力を尽くした高橋統祥(高橋村長の父)や600キロもの荷を背負い山道を歩いた太郎といった犠牲のうえに、1955年ついに完成した野々海池(注3)。冬に10メートル積もるといわれる野々海湿原の雪解けを水田に利用した、この一大事業も「なんとしても米をつくりたい」という住民の意思によって作り上げられたものである。また、渡邊加奈子さんの論文(注4)で取り上げられている、栄村の取り組みを代表する「道直し」事業や「田直し」事業はそれまでも農家の手によって行われてきたものを活かし、より良い形にしてきたものである。

では、このような実践的住民自治における取り組みが「ウイナーコーヒー」だとすれば、「コーラ」にはいったい何が当てはまるのだろうか。同室の先輩とこの話をしていたときに、私が「コーラは市町村合併なのではないだろうか」と言ったところ、「いや、そもそも合併でより良くなるわけではないのだから、それはコーラではないのではないか」という指摘を受けた。よく考えればそういうことも言えなくはないのだが、実際に合併した地域の人たちの中には、政府が合併のメリットとして掲げている「地方分権の推進」や「多様化する住民のニーズへの対応」といった文言に納得し、合併によってその地域が発展すると信じている人がいることも事実である。このような点から、私は今回の文脈において、「市町

村合併」を「コーラ」的なものとして捉えることとする。

私は近代から現代まで日本を貫いている精神構造は「ウィンナーコーヒー」的というよりも「コーラ」的なものだと感じている。今の民主主義（真に民主主義足りえているかは別として）や資本主義も結局、民衆の力によって獲得してきたものではなく、あくまでも上から用意された「コーラ」を享受しているにすぎない。

しかし、国からの強制的な市町村合併や地方分権による恩賜的な地方自治ではなく、栄村のように自分たちの力、自分たちにあるものでなんとかしようという快復的な地方自治こそ本来あるべき姿なのではないだろうか。

このように今回栄村での暮らしをみていくなかで、先日読んだ鶴見俊輔と網野善彦の対談を記した『歴史の話』において、鶴見俊輔が「魚一匹釣るという行為と、日本の学問とのあいだに血管が詰まっているんですね」（注5）という話をしていたことを思い出した。残念ながら魚一匹も釣ることはできなかったが、このような何気ない栄村の暮らしの中に学問に通じているものがあることを再認識することができ、人びとの暮らしと相互に影響し合う「生きた学問」をする必要性について考えさせられた。

2.見える循環

また、私の興味を引いたのは「顔が見える生産関係」である。プログラム中に出てきたさまざまな料理は、そのほとんどが「顔が見える料理」であった。毎日食べた、あの純粋な甘みと分厚い肉質が美味しいトマトやアスパラは、前日に畑を見ていたし、あんぼをはじめとした郷土料理は、誰が作ったのかを考えるまでもなく、すぐにその関係性が見えるのである。

今回のプログラムを終了して、京都に帰った日の夕方、夕食を作るためスーパーに行ったときに、この考えはより鮮明になって、私の関心として思い浮かびあがってきた。スーパーに並ぶ食材、そのほとんどは顔が見えない、もしくは見えにくいのである。野菜すら産地の表示だけであるし、多種多様な加工食品にいたっては、もはや原材料がどこの国のものであるかを特定することができない。

1月頃、鉄鋼業の会社が行っている、無農薬で、栄養を含ませた水のみで育てた野菜や、赤色発光ダイオードで育てた野菜があり、自然環境に影響されず、収穫が期待できるというようなことや、他業種からの農業参入が約100社もあるということを報道していた。

たしかに年中安定した値段で野菜が手に入るなら、結構なことだと思われるかもしれない。それもいま流行りの無農薬である。しかし、少し考えてほしいのは、それが「農業」と呼べるだろうか、ということである。

「農作」と同じ意味に「耕作」という言葉がある。田畑をたがやして作物を植え栽培することだが、私の名前のコウも、この「耕」という字で、「耕す」という言葉は、とても好きな言葉である。「耕す」とは、主に田畑（土）をクワなどで掘り返して、作物が育ちやすいようにすることをいう。

私は野菜などの農作物は、やはり土を耕し、日の光を浴びて育てるものだと考えている。工場で育てた野菜はたしかに農薬や土壌汚染の影響を受けないかもしれない。しかし、注目すべき点は、そこでの野菜というのは、自然の循環からは完全に離別しているという点である。もはやここでの野菜は生産物というよりも、加工品という印象を受ける。名づけるならば「工菜」とでも言うのだろうか。

農業というものは、鉄鋼業のようにただ何か一つのものを作って終わりという単純なものではない。その土地の生態系の一部として働き、大きい視野で見れば、その地方全体のライフスタイルを形作るものではないだろうか。なにも耕すのは、土だけではない。土を耕すということは、自然のサイクルを耕すということと同意である。

たとえば、無農薬の田んぼには、どじょうが住み、虫が来る、そうすることで、野鳥は来るし、合鴨もはなせる。つまり、ビオトープ（小生活圏、特定の動植物が生きられる生活環境を持つ地域）の役割を果たすのである。栄村では田んぼの水路にまで岩魚がいることがあるとの話であった。また、田んぼには地球温暖化を防ぐ効果もある。そういった意味で、野々海池周辺に広がるブナ林も、この自然のサイクルの一翼をしっかりと担っていた。広葉樹であるブナは高い保水能力や土壌生成の力を持ち、また、ブナの足元に落ちていた無数のブナの実には多くの野生動物を育む基盤となっている。現代の都市型生活は合理性や効率性を最大最高の価値としていると言われるが、「人が人として生きていく」という目的に沿って、真に合理性や効率性を追求するならば、田舎にある持続的な暮らしを無視することはできないのではないだろうか。

そもそも、自然環境に影響されるのが、農業ではないだろうか。最近では、年中いつでもキュウリやトマト、白菜が手に入るが、今の若い人はそんなことに違和感を覚えることはないかもしれない。もともとキュウリやトマトは夏野菜なので、冬にとれるはずもない。今はハウス栽培などで冬でも収穫できるようになっているが、これは「旬」というものを

無視した行為で、旬でない時期にその野菜を作ると栄養価が大幅に下がる場合もある。そもそも旬でない時期に作ると何かしら不都合が出てくるのは当然と言えば当然である。ちなみにあのトリュフでさえも2月を最盛期とする『旬』があるのだ。栄村では雪の時期が多いため、農業だけでなく、狩猟採集に頼るところも大きい。よって、他の地域よりも季節による影響を強く受けるのであるが、それゆえ自然とうまく付き合う術を編み出してきたのであり、それが栄村の魅力の一つでもあるのだ。また「旬の食物」を食べることは「季節」を感じることである。トマトを食べれば夏を感じるし、コゴミを食べれば春を感じるのである。それをいまさら「夏季限定」などと、奪った旬を、もう一度希少価値として食品に添加しようとする食品産業にはあきれてものが言えない。

しかし、田舎で育った私でさえも、こうした当たり前のことが、いつの間にか少しずつ当たり前でなくなっている自分に気づく、徐々に都市社会化していることを都市で生活しながら気づくのはなかなか困難である。やはり普段の生活を離れて、「栄村」的視点から見ることによって、日ごろの暮らしを相対化して考えることが可能となるといえる。

また、道の駅「またたび」で、野菜や果物が破格の値段で売られていたが、それは何も栄村だけに限ったことではなく、各地の農村の直売所などでは、形は悪くとも美味しい野菜が安い値段で数多く並んでいる。しかし、実際に日本のスーパーや飲食店に出回っている野菜に、どれほどこのような野菜が並んでいるだろうか。また、外食で付け合せのサラダを食べるたびにうんざりさせられるのはなぜか。食料自給率が40パーセントと、先進国で最低である日本において、これらの問題は深くつながっているように思う。なお、この点は福島ゆかりさんが指摘している（注6）農産物の販路確保という問題につながると思われる。

3. 郷土の文化と愛国心

話を変えて、最近よく話題に挙がるようになった愛国心問題と絡めて少し考察してみたい。愛国心表記の問題で揺れている教育基本法改正において、自民、公明両党は次のような意向を示した。

「自民、公明両党の教育基本法改正に関する与党検討会は12日、最大のハードルとなっていた『愛国心』の表現について『伝統と文化を尊重し、それら

をはぐくんできた我が国と郷土を愛する』とすることで合意した」(注7)

このほか、もはや当選が確実視される現内閣官房長官である安倍晋三が立候補時に、目指すべき国のあり方として、「文化、伝統、自然、歴史を大切にする国」(注8)と話している。

一見、「伝統や文化を尊重、大切にする」といった、いかにももっともらしい言い方をしているが、伝統や文化を色濃く残す田舎と愛国心、そして市町村合併推進という視点から考えてみれば、上記の一文がいかに矛盾したものか理解できる。私は、2日目のグループ別のプログラムで、内山和紙の紙漉き体験をした。講師である広瀬進さんによれば、今この内山和紙を作る人は村内に数名とのことであった。紙漉きは予想以上に難しく、広瀬さんと同じ動作をしているつもりなのに、なかなかきれいな長方形にならない。これぞ職人の技であり、伝統であるということを実感させられた。

こうした伝統が存在している一方、昨今の市町村合併を見てみると、政府、政治家がいかに「伝統・文化」に興味がないのかがわかる。私の故郷も合併で消えた一つである。合理的な考えのみで市町村を合併し、過疎などを助長している市町村合併を行っている裏で、「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛する」などとは冗談にもならない。郷土を愛せと？ あなたたちが消したのではなかったのか。

また、伝統や文化というものを尊重しようとするほど、逆に「日本」という「国」が見えなくなるというパラドクスが存在すると私は思うのである。伝統と文化を尊重するならば、広くは、琉球やアイヌという地方固有の特質が出てくるのであって、日本国などというものが出てくるはずがない。まして外の世界との接点が少なく、縄文時代から人が住んでいたという秋山郷などを簡単に「日本国」として位置づけられるものだろうか(ただ秋山郷資料館の尋常小学校の資料に「テンノウヘイカバンザイ」という頁があったことが、天皇制がこんな山奥まで浸透していたという事実を示していた、個人的に興味深い)。さらに、栄村の中でさえ、青倉地区では「あんぼ」という料理を、秋山郷では「あっぼ」と言ったりするような言語的な相違もあることからわかるように、方言という違いも日本が単一民族でないことを如実に示している。

今回和紙作りを指導してくださった広瀬進さんや秋山郷を案内してくれた福原照一さんをはじめとした村民の方々は、自分たちの暮らしや文化を自分の口でしっかりと語れる人たちであった。それは何も強制されたわけではなく、個人的に興味を持って文献を読み込ん

だりしているのである。また、上記したことに関連して、宮部結さんのレポートの「村の物語と、現在の村人が直結している」という部分にとっても共感するところがあった。このような郷土に対する向き合い方は、けっして国が主導して得られるものではないと私は考える。

しかし、全国的にこのような伝統芸能が失われつつあることは事実であり、後継者不足をどのように解消していくのかという課題が残されている。これも福島ゆかりさんが論文で指摘している（注9）限界集落が直面している高齢化、過疎化という問題と直結する重大な問題である。

4.空間としての栄村

さて、2日目の夜には、村民の方々との交流会があり、バーベキューをしたのだが、ほとんど学生は食べ役に徹してしまうほど、地元の方たちがよくしてくれた。この交流会の雰囲気、私はどこか懐かしさを感じていた。それは小さい頃によく親の仕事の関係で、そういった集まりがあり、顔を出してはおつまみを頂戴し、大人にからかわれていたことを思い出していたからかもしれない。大きくなってからはこういった集まりに参加することはほとんどない。いつもは喧々諤々の議論が行われているようだが（そちらも参加してみたかった）、今回は本当に交流会といった感じであった。

バーベキューのように、にぎやかに食べる空間ではやはり心が開くのだろうか、普段大学ですれ違うだけの人や初めて会った人とも色々話すことができた。寄宿舎へ帰った後も、食事をする部屋で、みんなお酒などを飲みながら、わいわい話すことができて、今回一番楽しかったのは、こんな夜の時間だったように思う。

さて、私は一言感想において、「栄村では、『考える』ということよりも、五感で『感じる』ことによって得られるものが多い」と書いた。また松尾さんも「栄村では時間の流れがちがう。ゆったりと流れている」と感じている。さて、栄村という空間で感じた、このような感覚が意味することは一体何であろうか。自らの感覚で捉えていることを言語化・理論化することは困難なことであって、現段階では限界があり、あくまで仮定として考えてみたい。

単純に五感ということで考えるならば、酒井春奈さんの感想では、「稲のにおいがとても強い」・「野菜の味が濃い」と、それぞれ自分の鼻（嗅覚）や舌（味覚）で感じたことであ

るし、景色を見て泣いたという石川寛さんは目（視覚）で、福島ゆかりさんが論文の序章で語っている「静けさ」（注10）は耳（聴覚）、そして山でブナをじかに触るのは手（触覚）と言えるだろう。栄村では、このようにさまざまなものが私たちの五感に語りかけてくる、それは全体として「空気」とか「空間」と呼んでもいいと思う。

しかし、都市型の社会では、このような人間の五感の豊かさは失われている。通り過ぎていく排気ガスのおい、食べるのはスーパーの気の抜けた野菜、目に映るのはコンクリートの塊、溢れかえる電子音、そしてこのキーボードの無機質感、当然と言えば当然だ。こうして考えてみると、一言感想では漠然と、「栄村では、『考える』ということよりも、五感で『感じる』ことによって得られるものが多い」と書いていたことが、幾分くつきりとみえてきたように思う。私なりの言葉でまとめるとするならば、栄村は「人の感覚を喚起させる空間」であるということができる。

最後に、ゆったりとした時間の流れについて、労働と余暇という視点から少し考えてみたい。

現在、労働と余暇は都市型社会において完全に切り離され、労働は経済活動として、労働者は勤務時間という社会的な時間の区切りに従い行動している。そして、余暇は各人の私的な自由時間、消費する時間として捉えられている。だが、現代の余暇とは近代的なものであり、また都市の人びとは、自分たちの余暇をどのように使おうかとやっきになり、それが都市型の消費に拍車をかけている。自由になる時間があるということは、「選択」する必要を迫られるということの裏返しでもある。

しかし、栄村をはじめとする田舎、農村では、労働と余暇が完全に切り離されたものではなく、有機的につながっているように感じる。たとえば会社での付き合いと余暇での付き合いはほとんど別のものであるが、農村では、農作業とその後の寄り合いや余暇が、厳密に区切られているわけではない。また、今回の各体験は労働といえるようなものではないにしろ、その体験とその後の交流会は連続したものであって、授業と余暇という時間で区切られている意識はなかった。いうなれば、「暮らし」という大きな流れの中でそれらが渦巻いているのだ。このような生活における諸領域の連続性・関連性を、流れの中に身を置いていない私たちが実感・体感するときに、時間をゆったりと感じさせてくれているように思う。これが時間をゆったりと感じさせる原因だというわけではなく、あくまでも要素の一つとして仮定することはできないだろうか。

おわりに

今回の栄村ワークショップにおいて、私たちを暖かく迎えてくれた鈴木さん、高橋村長をはじめとした栄村の方々と企画・運営してくれた精華の先生方、渡邊さん。そして、普段話す機会がなかった精華の学生さんたち、その他大勢の方々によって、今回の授業がとても楽しい、有意義なものになったことに感謝しておきたい。

注釈

1. 竹竿に糸と毛鉤（疑似餌）だけを使い、川魚を釣る日本古来の釣り方。一つの毛鉤を活かして釣る。
2. ロッド（竿）とフライ（疑似餌）、リールを使い、魚を釣るイギリス発祥の釣り方。状況に応じてフライを選択・変更する。
3. 「国内現地研究Ⅱ」で配布された鈴木敏彦氏のレジュメ「野々海開拓の概要」、2006年。
4. 渡邊加奈子「“むら”の生きる道」、京都精華大学人文学部、2005年。
5. 鶴見俊輔・網野善彦『歴史の話』、朝日新聞社、1994年、p126。
6. 福島ゆかり「自立をめざす長野県栄村：その暮らしと自治」（『京都精華大学大学院人文学研究科 2005年度修士論文集』所収）、2006年、p312～323。
7. asahi.com (<http://www.asahi.com/politics/> 2006.4.13 取得)
8. 安倍晋三ホームページ (<http://www3.s-abbe.or.jp/> 2006.9.3 取得)
9. 前掲、福島、p277。
10. 前掲、福島、p268。

自然と伝統が残る村—栄村

205K115 吉田 晃子

1. 「自然が近い」という生活

環境系の勉強をしていると、「自然が近い」「自然が遠い」という言葉を耳にすることがある。栄村では、「私自身がいろんな動植物に出会う」＝「自然が近い」ということを感じとった。私は、今回の栄村と同じ「国内現地研究」で、滋賀県高島市針江地区に2泊3日お世話になったことがあるが、そのときに感じた「自然が近い」とは違う「自然が近い」という感じだった。

栄村に向かうバスの中で見えた、大きな川や、たくさんの田んぼの景色。朝方には見られないといわれている野ウサギの発見。Mother tree であるブナがうっそうと茂る姿。足元にいた脱皮したてのとんぼ。本の上でしか見たことがなかったオトシブミの巣。突然部屋に現れた 3,000 円はするだろうといわれるクワガタ。どこにいても蜂や蛾などの飛ぶ虫がいるという暮らし。こんな生活が4日間続き、普段見られないものや、体験しないような光景が視界に広がっていて、私には予想もしなかったものばかりだった。栄村がいかにも「自然が豊かであるか」ということを身をもって感じ、「自然が近いな」と思った。

滋賀県高島市針江地区の方の「自然が近い」という意味は、栄村のそれとは異なる。針江には川端（カバタ）と呼ばれる各家が所有している湧き水がある。水が湧く囲いの部分をつぼ池、コイが泳いでいる囲いの部分をはた池と呼び、この2つをあわせてカバタと呼ぶ。つぼ池は野菜を冷やしたり、湧き水を飲んだりする場所で、カバタの周りには、鍋や勺、ザルなどが置かれて生活の場として使われている。はた池には、20年以上も生きているコイが飼われており、人が食べられない野菜のヘタ、鍋にへばりついた米をきれいに食べてくれるなどの働きをする。町にある豆腐屋さんは湧き水を利用して豆腐を作り、その豆腐をつぼ池で冷やすなど、各家庭がもつカバタの使い方はさまざま。また、カバタには川の水が流れ込むようになっており、川が汚れば、当然、はた池が濁る。だから、川掃除はみんなで協力しあう。このように、カバタの使い方や川の接し方について針江の方々と直接話すことで、私は「針江の人が水〔自然〕を利用している」＝「（針江の人たちにとって）自然が近い」と感じとつ



ていた。

今回、栄村の方では、地元の方々に普段の生活の中で、自然との接し方について詳しく話を聞く機会が少なかったのが、残念だったが、普段味わえない体験や、マタギの話などをじっくり伺うことができとても面白かった。

2.過酷な山登り

1日目の水路探索のときは、山道を登っていったのだが、そのときは「自然が豊か」という言葉は思い浮かばなかった。「自然はなんと大きいものなのか」とそればかりを考えていた。普段、山(自然)は遠くから見ているので、山のうっそうとした木々の中には入ったことがほとんどない。「木はこんなに大きく、空はこんなに小さいのか」という体験はしたことがなかった。自然といえば「空が大きく、木は小さい」という私が考えるいつもの「自然」とは違った。

水路探索では人が通るような道沿いにある水路に沿って歩くものだと思っていたので、服装は七分袖ぐらいでいいだろうと勝手に思い込んでいたのだが、その思い込みは見事に外れた。

まず軽トラックに乗ってかなり山の上まで行った。どこをめざしているかさえわからないまま、ただひたすら山を登る車。地元の人々の運転とあってか、山道だということのものすごく速い。だが、ふとみれば、道の一步先はがけっぷち。いま振り返っても恐ろしい光景だ。だが、水路の水が落ちる小さな滝や、山の上にある田んぼの風景を見ることができ、「どこのアトラクションにも負けないスリルと面白さ」があった。

着いた場所は草むら。草むらといっても、自分の背丈より高い草が生える、獣道と喩える道さえない所だった。半袖半パンの男子学生がいて、地元の人が「自然をなめているな」と言って笑い話になったが、実のところ自分も七分袖なので、笑えなかった。

「プログラムの選択を間違えたかもしれない」と本気で思いつつ、さっそく歩き出したのだが、私の視界にあるのは草と木の枝だけ。前を歩く人を必死に追いかけて登る羽目になった。水路探索で覚えていることといえば、草・草・草と、枝・枝・枝だ。地元の人々の慣れた歩きにただひたすら追いつこうと、無我夢中で歩いた。たまに休憩はあったが、休憩中は息を整える程度にしかならなかった。たまに足元にキノコなどを見つけたのだが、写真を撮っている暇などない。もし撮っていたら、遭難していたはずだ。「遭難したらどうしよう」とさえ登りながらよく思ったものだ。今なら笑い話になるが、それぐらい人を見

失うことに恐れを抱いていた。山はたしかに美しい、そこにいると落ち着くが、舗装もされていない、ただただ草と木々が自己主張するようにうっそうと生えている場所に放りだされたら、きっと「怖い」と思うのだろうと考えていた。木の枝をまたいだり、くぐったりして、探検隊になった気分になるくらいハードな水路探索であった。

目標地点についたときには、手や腕は血だらけだった。草で腕を切り、手首は枝で。いや、途中にバラ科のような棘がある植物があったので、それかもしれない。とにかく「過酷な山登りだった・・・」と思い返していた。しかし、これを地元の人、水路に溜まった枯れ草を取り除きながら、登っている。高齢者では水路の管理をしたくてもできない状況になるなと思った。あまりにもハードだ。だが、ハードなスピードでないと、日が暮れてしまうし、ヘビや熊などに出くわす危険もある。私たちが知っている山とはまったく違う。舗装され、人が主に行き交う安全な道ではない。この山では、安全など保障されない。どこにどういう危険があるかなど、まったくわからない未知の世界。だからこそ、恐れを抱くのだろう。

途中、昔田んぼだったところを見つけた。それもかなり山の上のほうで、だ。昔の人は、こんな山奥まで、車もない時代に、自分の田んぼを耕しにきていたのだと思うと、生きるためとはいえ、かなりの労働力がいったことだろう、昔の人はすごいと思う。最近、テレビ番組などで、食べ物をよく粗末に扱ったりしているが、山に登り、田を耕したり、水路を管理する暮らしをしていたら、絶対にそういう行為はできない。汗水ながして苦勞をして収穫できた米や野菜をなぜ捨てなくてなはならないのだろうか。食べ物が溢れ、ただ値段が安いかわいさだけを問題にするという私たちの生活は、一つ一つの米や野菜に込められた農家の気持ちを忘れていないのだろうか。いや、忘れたというよりも、想像さえできない環境で私たちは暮らしているのだろう。

だからこそ、今回水路探索に参加してよかったと思う。本で読んでも理解ができず、想像しようにもできないのならば、行くしかない、出会うしか手段がない。なんとなくというレベルから出発しつつも、少しずつ実感できるように、今後もボランティアや地域の活動などをおして、今回の体験を生かしていこうと思う。

3. 狩りの方法

2日目はマタギの話聞いた。聞けば聞くほど興味深かった。昔と今の猟では、意識が違い、やり方が違うということがわかっていき、昔の人の猟（熊を間近に引き寄せて狩る猟）

にはとても驚いたものだ。

伝統的な文化とは「不変のもの」とどこか感じていた私だったが、今回のマタギの話聞くことで、実際は少しずつ新しくなっていることに気づかされた。

今は無線を使って場所の確認をするが、昔は薬きょうを吹き、音の回数で連絡をしあっていたそうだ。また、女の人と道端で会っただけで、もう一度家にもどり、そこからまた山へ向かうということが、昔はされていたようだが、今は女の人と出会っても話さない程度で終わっているそうだ。その一方で、今でも猟に行くときは、唄を唄ってはいけない、禁句（「死ぬ」など）をいつ発してしまうかわからないのでしゃべってはいけないというルールが残っている。山の神である女の神様に嫉妬されて守ってもらえない、山を侮るような行為（唄う）はさける…ということなのだろうかと思いながら、話を聞いていた。

熊を狩るには、チームワークが不可欠だ。マタギをする人たちは、普段の生活の中で信頼などを培っていたのだろうなと思った。そうでなければ、ほとんど話さない猟の中で、「この人についていったらよいのか」という不信を抱いたりすることにつながる。生活の中で、仲間とコミュニケーションをし、猟の中で経験を盗んだり教わったりする。なんだか、職人みたいな感じだなあと感じた。

また、ウサギの狩り方も教わった。資料展示で見えていたウサギを狩るときの道具「輪俵」があったので、何気なく「この道具を使ってウサギを狩っていたのか」と聞いてみた。すると、その資料展示の説明だけではわからないことがあった。資料展示には、道具を投げると、ウサギはワシなどの鳥の羽音と思い、固まってしまうので、そのときにとるのだと説明が掲示されていたので、それでわかった気をしていた。だが、それは自分の中でウサギの狩り方を勝手に想像したものだということがわかった。それを今回実感したので、今後は、資料について詳しい人に尋ねることができるなら、そうしようと思った。それによって思い込みは解けるし、もっとたくさんを知れるからだ。

講師の福原和人さんのお話では次のようなことだった。

まず、ウサギの足跡を見つける。ウサギは巣の中にいるが、危険な動物がいないかを確かめるために耳を出すことがあるので、それを探す。見つけたら、ウサギの真上に輪俵（木の枝なども効果あり）を投げる。ウサギは巣の奥に逃げるので、急いで足で巣の入り口を塞ぐ。それから、巣の中に手を伸ばし、ウサギを捕まえるというのだ。資料だけでは読み取れない猟のやり方だった。ちなみに、福原さん自身はやったことはないが、やってみたいと言っていた。コツが相当要りそうだが、その体験をしたときはぜひ聞いてみたい。

4.新しい出会い、そして新しい関係へ

最後に、もうひとつ、どうしても記しておきたいことがある。写真を撮っていて、「こういう風に撮りたい」というものが一つだけあった。それは、とんぼを間近で撮ってみたいということ。とんぼはたくさん見かけていたのだが、なかなか撮れずにいた。あるとき、あじさいについたとんぼを見つけて撮ったのだが、体の赤がきれいに撮れなかった。もっと近くで赤を撮れないだろうかと思っていたら、とんぼがノートにふっととまってくれた。

最初はカメラを写せない状態で、おろおろしている間に飛んでいってしまったが、またもう一度とまってくれたので間近でいろんな角度から撮ることができた。

針江に行ったときに聞いたのだが、「写真は、偶然撮れたものじゃない。撮ろうと思っていれば撮れる」と言っていた写真家がいたそうだ。そのときは、「撮ろうと思っても撮れるものではないから、すごいことなんだけどなあ」と思っていたが、強く求めると、自然から近寄ってくれるのだと心から感じた。今回はたまたまかもしれない。だが、そのたまたまも、私にとってとても貴重な体験になった。



偶然話しかけた人や、偶然出会った人、偶然呼びかけられることも、一つの出会いで、そこから新しい関係へとつながる。たとえば言えば、話を聞くだけの仲だったはずなのに、いつしか、「稲刈りにお出で」と誘われている。稲刈りをさせてもらうことが目的ではなかったのに、一緒に稲刈りをする関係へとつながった。またそこから、深い関係へとつながっていくかもしれない。滋賀と長野。とても距離は遠いが、心はいつも長野と滋賀を往復している。今はどんな風景になっているだろうか。稲刈りはどこまで進んでいるのだろうか。もう冬支度とかしているのだろうか。

また、長野に行けるのならば、ぜひ行きたい。

おわりに

マタギの話を知っていて、熊が増えたことを「肌で感じる」とマタギの話をしてくれた福原和人さんがいっていた。なかなか熊を肌で感じるなどといえないが、熊とともに暮している人ならではの言葉だ。こんな風に地元の人（自然とかかわる人）の話の中には、私

たちが使わないような表現がある。今回は、地元人にインタビューなどできなかったが、もし今度そういうことができる機会があれば、もっと「地元の人言葉」を聞きたいと思う。

長野県民から見た栄村

204G168 本林 和佳奈

1. 村に着く前に考えていたこと

栄村は長野県の北東の県境に位置する。事前に栄村 HP で地図を確かめると予想以上に広く、大きさは村というよりは市に近いのではないかと思った。京都市左京区と同じぐらいの広さがあるらしく、それを聞いた私はやはり広い場所だなあと感じた。ちなみに私は栄村も秋山郷もこれまで知らなかったのだが、父と母（二人とも長野生まれ）は秋山郷を知っていた。

長野県はやや縦長で、北に「犀川」と「千曲川」、南に「木曾川」と「天竜川」、合わせて四つの大河川が流れている。そのうちの一つ、北の「千曲川」は山奥で小さな流れが生まれ緑や岩の間を流れて、豊野のあたりから栄村まではその道のりにほぼ沿っており、バスの窓から見下ろした景観は絶景だった。この「千曲川」が「犀川」と県北部で合流して県境を越えて新潟県に入ると、名前が変わってあの日本一長い河「信濃川」になる。私は長野県のど真ん中の松本市で生まれ育ち、母の実家（旧北安曇郡・現大町市）へ向かう途中では毎回必ず「犀川」を渡っているのだが、「千曲川」を見るのは初めてだったので、少し浮かれながら「信濃の国」（県歌。長野県の地理・観光地・歴史などを全六章に渡って紹介する長い歌。ちなみに私は二番までしか歌えないが、年長者になればなるほど最後まで歌える人が多くなる）の河を詠う箇所を思い出していた。こういう時に無意識に「信濃の国」を思い出してしまうのは信州人の性だろうか。

松本市は中部で栄村は北部。長野県は北部と中部と南部とでは文化が少しずつ違っていると子どものころから聞いていたので、自分の周りと比べて栄村がどのように違っているのか、また似たところはどんなところかと期待しながら、私は松本から途中合流した。レポートでは班毎に分かれたグループ行動の際の話と、栄村と私の周囲を見比べて気づいたことを書くことにする。

2. 紙漉き

ABC 班の別行動になり、私は内山和紙作りを体験させてもらった。講師は内山和紙の職人・広瀬進さんである。紙漉きの前に簡単な講義をお聞きした。

内山和紙の成り立ちの話では「和紙」そのものの成り立ちから聞いた。紙は中国（漢）で発明され、その後日本にも伝えられたが、その製造方法を改造してできたのが現在知られる和紙の原点だ。漁の網や羊の皮が混ざっていた中国の紙とは違い、和紙の材料は植物のみで太い繊維と細い繊維が縦横無尽に重なってできており、触ると多少でこぼこ感があるのが特徴。栄村の内山和紙の作り方は元は京都から伝えられたらしい。

内山和紙は、昔は決まった植物からそのまま繊維を取っていたため、作る過程では樹皮などで多少黒みがあった。そこで職人たちは京都ではできないようなやり方で漂白する努力をしていた。それは豪雪地帯という土地を利用して、積もった雪の上に楮を晒すことで少しでも白くしようとするものだ。雪に多少なりとも漂白作用があるとは初耳で意外だったので、私はとても驚いてしまった。

内山和紙に限らず、日本全国では伝統工芸技術を代々受け継ぐ新たな職人が年々減少しており、後継者不足が深刻な問題になっていることも聞いた。伝統工芸士の資格があり、それを取るために国家試験を受験する者も減っているという。伝統工芸に資格があるとは知らなかったのが驚いた。

過去と現在の材料の変化や、作り方の変化も教えていただいた。現在では昔とは違い、使用している紙の元になる紙料（水とのかき混ぜた液体）に溶かす繊維は市販されている漂白済みのパルプ（綿状）を使っているため、内山和紙特有だった雪を使った漂白はされていないようだ。また、漉く時に大量の紙料を溜めておく流し台に似た入れ物と、溶かしたのりやパルプをかき混ぜる千歯こきのような道具は、昔は職人によって木でしっかり作られたものを使っていたが、広瀬さんはそうではなく、市販されている少し小さめの紙漉き専用キット（一般の人向け）を使って作っていた。私はてっきり伝統工芸は昔ながらの製造方法を守って作られていると思い込んでいたので、和紙用のパルプがあることに驚き、紙漉き専用キットなるものが売られていることにも驚いたが、それをしっかり取り入れている広瀬さんに一番驚いた。伝統工芸でも新しいものを取り入れるんだなあと、意外で印象強い話だった。

そして実際に皆で紙を漉いてみたが、漉くまでは割合誰でも簡単にできたが、それを細かい網から剥がす作業にもっとも神経を削った。先に見本を見せてくれた広瀬さんは簡単にこなしていたが、いざ自分たちでやってみると大変に難しかった。うまく剥がさないと紙が途中からどんどん薄くなってしまったり、きれいなハガキ大のくっきりした長方形になるはずが何だかいびつな輪郭になってしまったりと、どうにもなかなかうまくいかない。

広瀬さんの素早く正確に綺麗なハガキを作ってしまう玄人技には驚いてしまった。

3. マタギ文化

講師には先祖代々マタギをしている福原和人さんが来て下さった。マタギの歴史や狩猟方法、熊の胆嚢についてなどを詳しく話してもらった。

マタギとは特有の文化を持つ猟師のことで、秋田マタギの子孫によって秋山郷に伝えられたといわれている。昔はかなり遠く（東北地方など）へ行行って狩りをし生計を立てていて、時には出向いた先を気に入った猟師が妻子持ちであるにもかかわらず、故郷を捨てて、そのままそこに住み着いて新たに妻を持ち子供を作って生きていったというエピソードもあり、私はいろいろな人生があるのだなあとしみじみと聞き入ってしまった。

しかし現在残っているマタギは十数名だけで、後継者がいないことが問題になっていた。受け継ぐものがないという点では内山和紙の職人と似たところがあり、伝統を守ることの難しさを改めて感じた。栄村では若者が極端に少なくなっているようなので、後継者も必然的に少なくなってしまうのだろうか。ふと、私の父と母の村でも働き手の若者が少なくなっていることを思い出した。

一般の狩猟期間は11月半ばから翌年2月半ばごろだが、栄村では4月ごろに有害動物駆除の特別許可をもらって猟をしているらしい。獲物は主に熊で、他に鳥や兎も獲る。マタギ猟は熊のいる場所を、熊の足跡やベテランの経験を生かして探し、撃ち手と追い手に分担を分けて熊を追い詰める「追い込み猟」に似た方法で行うのが特徴。現在では人間の数名グループだけで狩りを行うが、福原さんのおじいさんの頃は犬を連れていく習慣もあったという。撃ち手はベテランが優先され、福原さんは狩りを始めて15年になるが追い手を任されることが多いそうだ。何年かからプロと決まっていはいないが、線引きはいかに状況判断ができるかで決まると言っていた。現代では副業としてマタギをしているが、熊の胆嚢などの貴重なものを得るには必要らしい。昔は猟で生計を立てていたもので、いまよりもさらに命がけで、逃がすと大変だった。一度村を出ると、山小屋を拠点にして数週間家に戻らないこともあった。熊などの大物を仕留めて持ち帰ると村を上げて喜び、(本物と証明するため) その場で解体して美味しい内蔵などは仕留めた狩人たちがもらい、胆嚢などの貴重品は売買にまわされる。熊は毛皮・骨・肉・内臓など余すところなく使えるので、村人たちにとって大切な生活資源だったらしい。とくに胆嚢は、平らにして乾燥させたものを粉にして水に溶かし、煎じて飲むと滋養強壮・病気治療・その他の健康促進に大変よく効き

不思議な万能薬として、現在でも大変重宝されている。そのため、その価値を換算するとわずか 3.75 g の量で 7 万円になるというから驚きだ。

現在でこそショットガンやライフルなどの猟向きの強力な武器がたくさんあるが、昔の武器は専ら槍や矢などの刃物系だったため、人間の力だけで分厚い熊の体に致命傷を与えることは容易ではなかったらしい。仕留めるためにはまず槍の先を月の輪熊の首元（ちょうど月の輪のあたり）に刺し、反対の端を地面に突き立てておいて急いで熊から離れる。すると、近づこうとしてきた熊自身の体重で、槍が深く刺さって致命傷を与えられるという。説明することは簡単だがこれをするだけでも命がけで、昔の狩人たちの生きようとする意志と真剣さは現代とは比べものにならなかったのだろう。

現在の狩りはどうかというと、動物の間引き（数が増えすぎないように減りすぎないように）が目的のため、ハンティング向きに作られた強力なライフルは使用を禁じられている。散弾銃は普通のものでは分厚い熊の体には豆鉄砲のようなものなので、熊専用の大きな弾丸が出るものを使用する。飛び道具を使用するので、近距離用の武器が主流だった過去ほど危険はないという。事実、福原さん自身はほとんど危険な目に逢ったことはないが、おじいさんの狩人仲間の一人は熊の長い鉤爪の付いた腕で強力な一撃をくらい、後頭部のくぼみあたりから頭皮をべろりと額まで剥がされたらしい。その話を聞いて驚いた私たちは想像して身の毛がよだつ思いがしたが、剥がされた本人は頭皮をよいしょっと元に戻し、狩りから帰って治療をしたら治ってしまい、それから無事に生きていたというから、さらに驚いた。マタギの狩人はいろんな意味でタフなんだなあと感心するばかりだった。私の祖父の兄弟のうちの一人は月の輪熊に襲われて亡くなっただけで、そんな人もいるのかと思うと運やタイミングによるのかもしれないと感じる。

現在と過去の違いは狩猟だけでなく、習慣にも出ている。昔、マタギの猟師たちは狩りにでかける前に家で山の神様（女性らしい）へ祈りを捧げるのだが、出かけてから山に着くまでの道中でうっかり女性と出会ったり話したりしてしまうと、山の神様が嫉妬して狩りで事故にあったり大ケガをしたりするということで、家へとって返して祈るところからやり直したという。

現在はそこまではしないが、2月12日は山の神様の祭りの日なので、その日だけは猟に出かけないということは現在でも守っているようだ。また、道中で女性とすれ違う程度は大目に見て、猟に出る前は（奥さんを含め）女性とできるだけ話さないということを守るにとどまっている。山に狩りに出かけるのは昔から男性が圧倒的に多いから、こういうところ

に思想の影響が出ているのかもしれないと私は少し考えたが、根拠はない。興味深い話である。

熊が里へ降りてきて作物を荒らしたり人を襲ったり、自然保護団体から圧力があつたりと衝突が後を絶たないらしい。だが、熊サミットという会合で話し合っただけで意見交換をしていると聞いて、自然と人間のことを大切にしようとして模索している様子が見てとれ、これも過去のマタギから変化しながらも続いている現在のマタギのあり方の一つなのだなあと考えさせられた。

4. 似たところ、違うところ

北野天満温泉の入り口にかかっていた看板に、地元の方言で「ようこそ」や「ありがとう」などの言葉が書かれていたが、私の知っている方言とはぜんぜん違ってほとんど聞き覚えがなかったのに驚いた。半分くらいはわかると思っていたが、予想に反して10個のうちやっと1個わかった程度である。長野県は隣接している県が多いため、地域によって違う県の方言と非常に似通っている部分がある。私の知る松本弁は同じ県内の栄村というよりもむしろ静岡県に近い。位置から考えると栄村は別の県の方言と近いのではないだろうか。

さらにもう一つ、大きく違っていたのは「おやき」だった。松本でも父の村でも母の村でもおやきは「おやき」と呼んでいたが、栄村では「あんぼ」と呼ばれていた。また、作り方や材料も違っていた。私の知るかぎりでは、あんぼの中身には野沢菜のほかにも餡子も使うようだ。しかし、子どものころ私が食べた「おやき」の中身に餡子が入っているものではなく、主に季節ごとの野菜の惣菜（例：秋は茄子が入っている）や長野県お馴染みの野沢菜の惣菜、おからの炒め物などが入っていて、おやつというよりはご飯のおかずに近い。大きさも「あんぼ」よりふたまわりほど大きい。外の皮は、栄村の「あんぼ」は白と緑（よもぎを混ぜたもの）の二種あったが、「おやき」は一種類。作る過程も異なり、「あんぼ」は種を蒸して搗いたもので具を包んで出来上がりだが、「おやき」は蒸した種で具を包んだ後それを新聞紙で包んで水気を切って、さらにそれを熱くした囲炉裏の灰の中に直に放り込んで満遍なく焼き色をつける。そのため、ついては新聞紙の破片や灰を払ってから食べる（現在では機械化されてしまったのでまったく別物になっているが、私はこっちのほうが好きなので紹介した）。同じ県内でもここまで違うのはとても面白いと思った。

こごみ（シダ植物系の山菜でワラビやゼンマイとは別物。長野県ではポピュラーな食材で癖が無く食べ

やすいので、主におひたしなどにして食す。歯ごたえが良く、噛むとわずかに粘り気がある) という呼び名は松本でも柴村でも同じだったが、図鑑に載るような正式名称を知らなかったのも、以前これを知らない人に必死に言葉で伝えようとしてできなかった覚えがある。こういうとき、方言や通称の思わぬ弱点が出るようだ。

5.全体を通してのまとめと感想

とくに印象に残ったのは、村の人びとの親切な歓迎と説明、そして伝統と団結の歴史である。

父や母の村ではわざわざ役場へ出向いたりすることがなかったし、親戚以外の村人たちと話す機会もほとんどない。今回のように詳しい説明を受けたり村中を回ったわけでもないので余計にそう思うのかもしれないが、とても村人同士仲がいいと思った。野ノ海池の丁寧に地道に作られた景観を見ながら話を聞いたり、伝統を受け継ぐ人々同士でも仲良くしているのを見たので、そういった印象が強い。

私は下宿とはいえ、長野から実家を出て京都に移った身なのであまり大層なことは言えないかもしれない。が、だからこそ、正月や盆に父や母の実家へ出向いて泊まった時などに環境を多少なりとも見てきたので、田舎で暮らすことの不便さもわかる。だが、久しぶりに田舎を訪れたときには、なんだかんだと言いつつも正直に「やっぱり自然が豊かでいいなあ」と感じるがあるので、都会の人が田舎に憧れる気持ちも少しはわかるような気がする。この二つの気持ち両方に答えようと思うなら、東京や都会だけでなく農家や田舎も視野に入れた社会システムに、いきなりは無理というなら少しずつでもいいから変えていくことが絶対に必要だなあと、私は思った。

「村」との出会い

—長野県下水内郡栄村を訪れて—

204G165 宮部 結

1.はじめに

2006年8月末、初めて長野県の栄村を訪れた。

京都からやってきた者にとっては、信州の山の雄大さに圧倒されるばかりである。盆地の京都で山は見慣れているものだが、このようなスケールの山はまずないといっている。

その山々に囲まれた自然豊かな村が栄村だ。栄村に関する基礎知識もままならない状態で訪れた私が、3泊4日のプログラムをとおして考えたこと、感じたことなどを書いてみたい。

2.栄村の第一印象

栄村はとにかく自然が豊かであるという印象が残った。

野々海池の近くでは、日本でなかなか見られない貴重なブナ林や野うさぎなども見たが、なにより村の生活に息づく自然が豊かである。

まず、水道から出てくる水が違う。冷たいし、水道の水が美味しいと感じることが京都市内ではまずないので、驚いた。

栄村でご馳走していただいた野菜やお米もとても美味しかった。これは美味しい水を使って育てている作物であるからだろう。そして、作っている人が見える食べ物であるというのも、理由のひとつだろう。「今朝、うちの畑からとってばかりの野菜だ」と言われれば、それを差し出してくれた村の人の温かさが食べ物にこもるのだ。

村の人びとは、たしかにおじいさんおばあさんが多いが、年なんて笑い飛ばせと言わんばかりによく笑い、働き者で、私よりよほど元気な人たちが多くいる。そして村を訪れる前は、もっと閉鎖的で保守的な雰囲気かと思っていたのだが、遠くから来た何も知らない学生に対して、とても優しく接した。

村人たちは、自分たちを名前で呼び合う。まるで村中が親戚のようだ。「3.『今』と直結する、栄村の歴史」の内容につながるが、この名前で呼び合うという慣習は、長年その地に根づくことで生まれたのであろう。私の住んでいる新興住宅街ではまずありえないこ

とであり、「村」という存在を考える時に非常に重要な切り口になると思う。

3. 「今」と直結する、栄村の歴史

“村の物語と、現在の村人が直結している”

これは、野々海池で高橋村長のお父さんの慰霊碑を見た時も、6代目マタギの方の話を聞いた時にも感じたことである。この土地では自然で、ごく当たり前のこととして暮らしに溶け込んでいる感覚なのだろうけれど、私にはたいへんな驚きと発見だった。

私は、現在住んでいる京都府亀岡市の新興住宅街に、3歳の時に引っ越してきた。そのこととも関係しているのだろうけれど、いま私が住んでいる市の物語と、私自身はまったくつながりが無いと感じている。また、亀岡市は父や母が幼少期を過ごした土地とも違う場所なので、場所に関しても、人に関しても、親と記憶を共有することがない。私の物語と、親の物語は“舞台”が違うのだ。それは私にとってはごく当たり前のことだったので、マタギの話しをしてくれた福原和人さんが、資料館の中の写真を指差して「この人が4代目で、俺が6代目になります」と言った時は、資料館に飾られるほど村の昔の物語が、今までマタギの“血筋”として続いていることに驚いたし、代々その土地に根づいているという感覚を、私は栄村に来て初めて体感したのだった。

日本は都市化・郊外化という人口の流れや、核家族化を経験してきた。現在もその流れは続いていて、労働市場は都市の近くに集中し、職を求めて人口はあちらこちらの山村から都市へと流出している。都市は、そういった人びとの寄せ集めで成り立っているのだとすると、都市という空間は存在こそすれ、その物語と呼べるものはどこにあるのだろうか。仮にもし、都市にも物語があるとしても、そこに住んでいる人間と結びつくことのないそれは、村の物語と同じ存在であるはずがないと私は思う。

だからこそ、今、この日本で、村の物語と現在の村人が直結している「栄村」の人たちやその環境に目が向けられているのだと思う。私自身とても貴重な経験になった。

4. マタギの暮らし、文化

プログラムの 3 日目に、マタギの方の話を聞く機会があった。その話を聞いて私が考えたことをまとめてみたいと思う。

(1) マタギと山の神様

自然を相手にするマタギは大変な重労働である。

今のマタギは、たいていが他の職業に就きながら行っているため、そんなに無理に狩りに出る必要はなくなった。しかし、昔は多くの人がマタギで生計を立てていたため、多少の無理をすることもあり、危険な目にもたくさんあったという。たとえば、通常冬の間は狩りには出ないが、「穴熊猟」と呼ばれる方法で熊を狩ることがあった。雪深い山の中を歩き回って巣穴を探さないといけない「穴熊猟」は大変な労力を必要とし、同時に冬眠中の熊を一度起こし巣穴から出すという危険な方法であった。

狩りはチームプレイである。“追い手”と呼ばれる者が山の中腹から、熊を“打ち手”のいる方に音を立てて追い上げ、“打ち手”はそれを山並みの一番高いところで待ち構えて、しとめる。しとめる役には大きな責任がある。逃した熊が、誰を襲うかわからないからだ。まさに、熊が死ぬか、自分たちが死ぬかという命がけの作業であった。

そういうこととも関連して、狩りが成功するように、自分や仲間が命を落とすことのないようにという願いからか、マタギは山の神様への信仰が深かった。

山の神様は女性なので、狩りに出る日はできるだけ女性に会わないようにするのだ。もし家から狩りに出かける途中で女性に出会ってしまったら、もう一度家に帰って、出発しなおすという念の入れようである。現在はそこまで厳密に行ってはいないが、狩りに出る当日は、女性と口をきかないようにしているらしい。また、身内で出産や不幸があった場合は、狩りには出なかった。

山の中でのルールもたくさんある。山では縁起の悪いことは言わない。余計なことはしゃべらない。歌も歌わない。泊りがけでの狩りの場合、山小屋に泊まるが、そこにも山の神様が祀られていて、かならずお団子をお供えする。

(2) 「山の神様」と私の感覚との隔たり

栄村でたくさんのお話を聞いたなかで、この「山の神様」の話が私にはもっとも印象的だった話の一つである。

「へえ、そんな文化があるんだなあ。すごいなあ、面白いなあ」というのが、山の神様

をめぐるマタギ文化に対して私が最初に抱いた感想である、しかし、私がそのように感じたのは物語としての面白さ以外に、なにか理由があるように思う。

私が普段行っている、大学に通い、スーパーへ買い出しに行き、家でご飯を作って食べ、バイトに出かけるという生活のなかでは、私は同じ人間以外の何ものにも自分の精神や生命を脅かされることはない。少なくとも、そんな不安や恐怖を意識することなく生活している。実際には、私の生活の中にも自然の驚異はもちろん、それ以外にも自らが作り上げた経済市場主義といえる社会の中で、人間の能力を上回るコンピュータに支配され、不安や脅威にさらされる局面も多くあるはずなのである。しかし、すべからくそのような局面は隠蔽されがちであり、私たちはまるで“無敵”であるかのように毎日街を闊歩している。

だからこそ、柴村のマタギにおける山の神様への信仰は、じつは私自身にとってあまりピンとくるものではなかった。“無敵”のはずの私は崇める神やそれにかかわる文化をもたないからである。それが、私が「山の神様」の話をもっとも印象深く感じた理由のひとつでもあるのではないか。

(3) 自然と融合するマタギ文化

しかし、マタギのそれは自然と人の文化が融合したスタイルであるといえるのではないだろうか。

昔、山という大自然の中では、人の力とは小さなものだと思い知る瞬間がいくつもあったのだろう。「だろう」というのは、私がそのような山に入った経験がないからであり、私は自然と日常的にかかわることができない環境におかれて育ったからである。そういう人間が多いからこそ、いま、私はマタギの文化から学ぶことがたくさんあるように思う。

「共生」とは、もうずいぶん前から使われている言葉である。しかし、私はマタギの話を聞いてその言葉を思い出した。マタギは山の中に入り、熊を狩り、山の神様を崇める。語り手の和人さんは、マタギという文化をとおして「人間と自然の関係を守っている」と言った。

その人間と自然との関係をつなぐためにも、マタギにとって「山の神様」の存在は必要不可欠だったのではないかと私は思う。

信仰とは、人が自分より大きな存在としての自然を受け入れるところから始まるのではないか。無宗教といわれる日本人は、いま、(資源としての)自然を自分たちの力でコントロール

ールしようという試みに躍起になっているように私は感じる。そしてこれは日本だけでなく世界規模で起こっている深刻な環境問題を、どうにか先延ばしにしようという試みでしかないように思う。

「自然と人間の関係を守る」という視点から、私たち人間に何ができるのかを、マタギの文化は考えさせてくれる。

5.おわりに

じつのところ、私が今回の栄村プログラムに参加したのは、ゼミの教員である松尾先生が月に一度は通うというその村を一度訪れてみたいという軽い気持ちからであり、私自身は栄村への知識や関心が特別にあるわけではなかった。ゆえに、栄村の何に焦点を当てて見ようなどという思いもなく、プログラムに身を任せるまま栄村を体験することになったのだが、参加し終えた今では、どうしてもっと栄村について事前学習をせずに行ってしまったのかという後悔ばかりが残っている。そのくらい、栄村には私にとって今の日本社会のあり方を、ひいては自分自身の生き方を考えるうえで大切なものがあるように思う。そして、せっかくそのチャンスを得た今回のプログラムを活用し切れなかった自分が悔しくてしかたないのだった。

しかし、同時にこのプログラムだけで栄村との交流を終わらせまいという意識が生まれた。そしてそれは、このプログラムに参加した学生、企画・運営してくださった先生方や教員の方にも共通する思いになったのではないだろうか。

だとすると、今回のプログラムに参加できたことを、幸運に思う。

最後になりましたが、今回のプログラムに声をかけてくださった松尾先生、教務課の渡辺さん、栄村でお世話になった方々に心から感謝いたします。

さて、次はいつ栄村を訪れようか。

マタギからみる栄村の暮らしと継承

204K093 松井 麻友美

1. マタギの文化—福原和人さんのお話から—

秋山郷のマタギの文化は、秋田からやって来て大赤沢に住み着いたマタギが広めていった。秋山郷ではもともと、川から登ってくる鮭、マスを採り、畑を作っていた。田んぼは全体で 35 アールほどしかなく、お米ではなく雑穀を中心に食べていた。冬は狩猟と藁仕事をしてきた。

狩猟した熊は、自分たちの集落に運ばれて解体される。本物かどうかの証明するため、人に見せることをする。

今の狩猟は人数も少なくなった。秋山郷では 12、13 人ほどの人が狩猟をしている。後継者がいないことが問題になっている。マタギは犬などを使わないで、人だけの猟で、5～10 人以上で行われる。銃も、ライフルでなく散弾銃を使っている。ライフルは遠くから簡単に仕留めることができるが、散弾銃を使うのは熊をとり過ぎないようにすることも含めている。最近熊の住む場所が狭くなり、里に下りてきてしまっている。

猟をする期間は 11 月 15 日～2 月 25 日で、4 月～5 月の春熊は特別許可有害鳥獣駆除の許可を取り、行っている。自然保護のグループから苦情がきていることや、獲れる頭数が規制されていることから、このままでは狩猟できなくなる可能性がある。

年に 1 回、今年で 17 回目になるマタギサミットがある。最初はマタギをしている人が集まったものだったが、次第に自然保護のグループや県の人に参加するようになった。マタギの狩猟の仕方は自然との共生ができている猟であり、理解してもらうためにも大きな役割をはたしている。獲りすぎることなく、山を歩くことは地形など知ることができ、山を守ることにもつながっている。

秋山郷では、熊が獲れたときに小学生の前で解体をしたりしている。秋山郷に伝わるマタギの文化に、子どもにふれてもらうことをしている。

(以上、福原和人さんのお話をメモしたものによる)

2. 栄村の暮らしと継承

栄村の暮らしや文化には、都市では味わえないものがある。自然との暮らしが昔から続

き、今も続いているのだ。私が暮らしてきた地元豊橋では雪は滅多に降らない。屋根より高く積もる雪の生活なんて想像できない。山の木も針葉樹は少なく、広葉樹が多い。京都ではなかなか見られないブナの木が、すぐ近くで簡単に見ることができた。とても多くの自然に囲まれている。

また、人の関係があたたかい。道を歩いていると「どこからきたの?」と言われ、「遠くからよく来たねえ」と言われ、「お茶のんでけ」と誘われることがある。都市では知らない人に声をかけることはないだろう。栄村では挨拶をしたり、声をかけることが日常である。顔が見える付き合いをしているのだ。

しかし、高齢化し若者が少なくなっている。若者が少なくなると、村の活気がなくなってしまう。祭はとくにそうで、秋山のお祭は、昔はカラオケ大会や店がたくさん出ていたが、子どもが少なくなると共に祭が小さくなってしまったそう。また、助け合う力が少なくなってしまう。

栄村の暮らしは、下駄履きヘルパーで、高齢者の支援ができているが、人が少なくなれば、その介護もなかなか手がまわらなくなってしまうだろう。若者がいなくなってしまうと、栄村の暮らしを支えること、伝えていくこともできなくなってしまう。それは一つの文化がなくなってしまうことで、悲しいことだ。

今は、まだ 50 代や 60 代の人が入り、山菜などをとっているが、もう何年かしたら、できなくなってしまうだろう。そうなってしまうと、山に入る人がいなくなり、山菜の取れる場所を知っている人がいなくなってしまう。そして、山が荒れてしまう。

マタギも、山菜採りと同じように、後継者が不足している。マタギの狩猟は、5 人～10 人以上でおこなわれる。あとを継ぐ人がいなければ、この形もできなくなってしまうだろう。また、山のことを知り尽くしていなければできない狩猟方法なので、マタギがいなくなってしまうと、山を詳しく知っている人がいなくなり、山は荒れてしまうだろう。人と山と一緒に暮らしている。山に人が入らなければ山も荒れ、人も住めなくなってしまうだろう。

マタギの話をしてくれた福原和人さんは、一度村を出て、戻ってきた。その後の何年か狩猟をする父の姿を見て、自分もやってみたいと思い、マタギをはじめたそう。栄村に帰ってきてからでも遅くはない。身近にマタギなどの伝統の暮らしがあると、自然と暮らしになじんでいくのだろう。

しかし、マタギをしている人も秋山で 12、13 人ほどで、和人さんのように身近に感じる

ことができない人がいるだろう。今のマタギは昔とは違い、趣味のようなものになっている。昔は、生活がかかったものだった。生活の基盤になるものではないが、伝統を守っていくことをしていかななくてはいけない。

マタギを子どもに教えていくこと、ふれさせることが、熊を解体するときにあるようだ。熊が獲れたら、集落に持ち帰り、みんなを集めて解体をする。今は内輪だけのものになっているそうだが、小学生に解体作業を見せることがあるそうだ。子どもに熊の解体を見せて、マタギの文化を知ってもらうことをしている。都会では、鶏の首引きも見たことのない子どももいるのに、熊の解体を見ることができるのは特別なことだろう。

和人さんのように身近に猟をしている人がいなくても、大人になって、熊の解体を思い出し、興味をもち、関わってもらうことができるのではないだろうか。

マタギサミットなどの会合も開かれており、だんだんとマタギが広がってきている。また、狩猟が生活のためではなく、趣味になってきているそうだ。女性のハンターも多くなり、狩猟の幅が広がっているのだろう。しかし、趣味は人によって深さが違うだろう。マタギをしている人たちにとっては、生活している山が狩猟場である。その土地をよく知っている、マタギの組織もできている。趣味で猟をしている人は、どうなのだろう。本当に山を知っているのだろうか。山や猟を知らなければ、遭難など事故がおこることが多くなるだろう。また、マタギに興味をもち、秋山に住んでくれるかもしれない。

後継者不足を解決する決定的な策は思いつかないが、少しずつ外に向けての発信をしていることがわかる。暮らしに根づいている文化を伝えていくことは栄村にとっての特色にもなる。都市にはないもので、若者の興味をひくことができないかもしれないが、栄村にもどってくると、自然と目が向き、継いでしまうものなのかもしれない。

マタギの話の中で、いろいろな時代のことが話に出てくる。それは全部が体験談であり、都市では考えられないこともある。マタギの文化や狩猟の活動を身近に知らなかった私は、とても興味をそそられ、とても楽しい時間が過ごすことができた。このような実際の話をもとに本人から聞ける機会があり、とてもよかった。話をしていただいた福原和人さん、ありがとうございました。

栄村を訪問して

204G097 瀧川 奈緒

1. マタギと自然

私は 2 日目のグループ別プログラムで「マタギ」の文化について学んだ。今回、話す予定であった福原直市氏の急な入院のため代役として、息子の福原和人さんがマタギについていろいろと話をしてくださった。秋山郷のマタギは秋田県のマタギの子孫が流れ着いて伝わったといわれている。和人さんの家は秋田マタギの直系で和人さんで 6 代目になるという。秋山で見られる熊はツキノワグマ。昔はマタギで生計を立てていたため、命がけで猟をしていたらしいが、今では他で生計を立てていることが多いらしい。秋山にはマタギが十数名しか残っておらず、あとを継ぐものがない。しかも、今では、猟をするというよりレジャーとして猟銃を持つ人が増えているらしい。

そんな中、驚いた話がある。それは「熊が出たら寝たフリをしろ！」というのはあなたが間違っているということだった。熊は目が悪く近眼であるが、非常に耳が敏感で、動くものめがけて襲ってくるらしい。そのため、熊が出たら、じっとしておくのがよい、<動かない→寝たフリ>という表現になったのだろう。熊は目が悪く近眼ということには何か少し笑えた。

もう一つ驚いたことは、今年の春に小学生など小さな子どもをよんで、熊を解体する作業を見せたということだった。和人さんは「これを見せることもやっぱり教育の一つだろう」と語っていたが、都会では絶対に考えられないことだ。動物の解体、しかも目の前でバラバラになっていく姿をまだ幼い子どもが見るのだ。20 歳を過ぎた私だって見たことはない。私だったら耐えられないだろう。でも、秋山の子どもたちにしてみれば、それが当たり前なのかもしれない。昔は、それが当たり前だったのだろう。今は加工された商品が多く、その原型がわからないというものが多い。栄村から帰ってきたその日、松尾さんと松尾ゼミ生と話をしていたときに、今の子どもは魚が切り身で泳いでいると思っっているという話を聞いて非常に驚いた。何事も経験というけれど、そこまで経験しなければわからないのかと、頭が痛くなった。それに比べると、秋山の子どもたちは幸せなのかもしれない。

和人さんの話の中で興味深かったのが、「自然を守る＝何もしない」ということではなく、

「人間がある程度手を加えることが、人間にも動物のためにもなる」という話だった。私はそれまで、自然を守るためには、人間がいっさい手を加えず何もしないことが一番いいのだと考えていた（環境のことを勉強しているわけではないので、非常に偏った考え方だとは思いますが）。上述したように今では生計を立てるために熊を撃つたりはしない。自然を守るために熊が増えすぎないように、間引きをすることがあるらしい。

このレポートを書く前に、あるテレビ番組で NPO 団体「picchio」（ピッキオ）が紹介されていた。picchio は軽井沢で動物を保護管理している団体である。檻に捕まったツキノワグマに首輪式の電波発信機を取り付けて再び山に放し、電波を受信することで、クマの利用する場所、被害を出しているクマを特定している。クマの出没する深夜に巡回したり、ベアドッグとよばれる犬を使ってクマを追い払ったり、いてはいけない場所を教え込み、人間への恐怖心を持たせるなどの活動をしている。その番組で女優がこの活動について「（人間、熊の）どちらが正しいということではなく、どちらも正しくするための努力だ」と語っていた。ホームページを見たところ、彼らは人間と野生動物が共存していくことをめざしているようだ。ここで私の目を引いたのが、「駆除では解決しないツキノワグマ問題」という文章である。「多くの地域で、人間はツキノワグマを無差別に殺し、生息数を減らすことで被害をなくそうとしてきました。この方法は、一見効果的なようですが、実はあまり効果がありません。なぜなら、殺したクマが被害を起こす『危険な』クマであるとは限りませんし、原因を取り除かない限り、被害は続くからです」と書かれてあった。

マタギは無差別にクマを殺している訳ではないが、増えすぎないように間引きをしている。はじめは、双方の意見が違うのではと考えたのだが、じつはこれが、和人さんのいう「自然を守るために、人間が手を加える」ということなのだろうと私は理解した。最近では、動物の生態も動物の住める環境も変わってきている。自然を守るために、人間と動物が共存していくために、いま、できることを考えなくてはいけない、と「マタギの文化」をとおして改めて感じた。

2. 「田舎暮らし」をすること

私は宮崎県延岡市の出身だ。京都にくらべたら田舎、栄村にくらべたら都会、言ってしまうと微妙な土地である。そして、私の父は日之影町の小さな集落・中川という土地の出身で、その場所はどう考えても田舎である。そこは、延岡市から車で約1時間ほどのところ

ろにあり、平家の落人が住み着いた場所だと言われている。今では、祖母と伯父と伯母が住んでいる。今では、薪で炊くお風呂がなくなり、鳥も牛もいなくなってしまった。でも、改築は私が中学生頃だったので、改築前の状況をまだはっきり覚えている。そんな場所に田植え、稲刈りのたびに父について行き、夏休み、冬休みにも遊びに行っていた。期間は短くなったものの、今でも休みのたびに遊びにいつている。このような田舎を体験しているからか、栄村の印象は他の人とは違い「意外と都会だ！」と感じた。JRは通っているし、バス停はあるし、バスが通れるほどの道幅がある。私にとってそこは「立派な都会」だったのだ。もちろん、栄村で食べたものは自律をめざす村だけあって、村で作られるものばかり。こういう場所っていいな、落ち着くなと思った。しかしそれは、いいところしか見ていないからではないかとも感じた。栄村の人びとも、やはり私たちに「よそ行き」の顔を見せていたのではないかとも思った。私の方こそ滞在期間が短く、しかもいいところ取りだから、あまりわかっていないことが多いのだと思うが。私たちは3泊4日しか栄村にいなかった。私も、いくら田舎を知っているからといって、そこに住んだことはない。京都と延岡市しか知らない。その住んだ場所ですら本当に知っているとは限らない。

京都に戻ってきて、後輩と田舎暮らしについて話す機会があった。「自給自足のような自分たちで作ったものを食べるという暮らしにはすごく憧れる。今は隣の人の顔も知らないといわれているが、そんな暮らしより、近所の人と協力して暮らすというほうがずっと良い。でも、田舎には田舎独特の“つながり”があって、村の人が家のことを何でも知っているという状況にはきっと耐えられないだろう。だから私は都会でしか暮らせない」と、後輩は語ってくれた。知人からも、月に一度の集会とか、地区の運動会など行事があるたびにかり出されるという状況に耐えられないという声を聞いた。短期間、滞在するだけの場合と暮らすことはまったく違うことだろう。田舎には独特の“つながり”が存在する。私はその人とのつながりがすごく人間的で素晴らしいと思う反面、そのつながりに対する“しんどさ”を感じる。きついことを言ってしまうと、「田舎は素晴らしい」とかそういう類の言葉に気持ち悪さを感じるのだ。上記の2人がいうこともすごくわかる。私も地元をいたときは、そこから出たくてしようがなかった。でも、生まれた土地を離れたからこそ、よそ者として田舎を客観視することで、見えてくるものがたくさんあることに気づいた。結局、私は田舎へと帰っていくだろう。そしてまた、人とのつながりへのしんどさを感じるのかもしれない。

現在、日本では「田舎暮らし」が流行っている。団塊の世代が会社を退職したあとに田

舎に移り住む計画を立てている。そんな特集もたくさん見た。人が少ない田舎にとっては朗報だが、彼らは本当に田舎で暮らすことができるだろうか。何年もその土地に暮らしたとしても、よそ者はよそ者でしかない。中途半端に発達した場所で育った私ですら、田舎のしんどさを感じるのに、発達してしまった場所から来たよそ者が、田舎で暮らして行けるのだろうか。最初は良くてあとからその場所を離れてしまう可能性の方が高いと思う。遊びに行くのではなく暮らすことをもうちょっと考えて欲しい。色々な意味で田舎はそんなに甘くない。

3.まとめ

このレポートは栄村をとおして考えたことである。しかし、うまく文章にできなかった。私を感じたことの羅列でしかない。でも、レポートを書くことで普段考えていたことに向き合うことができたと思う。栄村で初めての体験をした。それは、栄村の人々の協力があったことである。お世話になった人に感謝している。そしてこれからも、ぜひ栄村に行きたい。今回のプログラムで今まで関わることのなかった学生と話をすることもできた。色々な人のつながりは難しいけど、人と出会って人とつながることは大切なのだと改めて感じさせられた。

都会ではないところ、都会にはないもの

—栄村で気づいたこと—

204G072 佐藤 友美

はじめに

8月26日から30日の4日間、長野県下水内郡栄村を訪問した。以前からゼミの担当教員である松尾さんや、先輩の福島ゆかりさん、渡邊加奈子さんから栄村の話聞く機会があり、栄村の写真も一度見せていただいた。一昨年にはある講義で栄村の村長・高橋彦芳さんが来校され、そこでも栄村の話聞くことができた。そしていつしか、話を聞くだけでなく、一度自分の足でぜひ栄村を訪れ、栄村を体験してみたいと思うようになっていた。そんななか、ある時、松尾さんから今回のプログラム（国内現地研究）で栄村へ訪問するという話を聞き、参加することにしたのである。

ここでは私が栄村で体験し、感じたことを書いていきたいと思う。

1. 栄村の印象

京都からバスで約7時間かけ栄村に到着。バスから降り、あたりを見渡してみると豊かな自然が目の前に広がっていた。見渡すかぎりの山、山、山。空気がすがすがしく、大阪にいるときには感じることのできない開放感があった。

この開放感を改めて感じたのは、後に大阪に帰ってからのことである。私は大阪生まれ大阪育ちでいわゆる都会生活の日常を送っている。栄村から帰宅して翌日、とある用事で難波に出向いた。そこには人がたくさん溢れかえっていて、空をふと見上げると高層ビルが立ちはだかっていた。いつもの見慣れた光景なのだが、それをとても窮屈に感じたのである。いままで何度も難波に行ったことがあるのに、窮屈に感じたのは栄村から帰ってきた後の今回が初めてのことであった。なんでこんなにも人が溢れかえっているのか。あたりを見渡して目に入るものはビルや広告看板ばかりで、豊かな自然なんてひとつも目に入ってこない。たくさんの人がせわしなく行き交う大阪とは違い、栄村にはゆったりとした時間が流れていた。

栄村はなんだかおばあちゃんの家みたいでもあった。どこのお宅にお邪魔しても「これ食べ、あれも食べ」といっぱいおもてなししてくれる。お食事処でも、どこまで注文した

もので、どこからがサービスなのかわからないくらい、メニュー以外のものをサービスで頂いた。まるで孫が遊びに来たかのように、とても暖かく素敵な笑顔で迎えて下さった)。

栄村はほんとうに食べ物が美味しい。先輩の福島さん、渡邊さんから、「栄村のご飯はほんとうに美味しく、こっちに帰ってきたら栄村の食べ物の美味しさはほんとうによくわかるよ」という話を聞いていたが、身をもって体験した。野菜はとっても甘く、噛めば噛むほどより甘さを増す。きれいなお水で炊いたお米はほくほくでとても美味。何度もおかわりをしたくなるほどであった。色んな種類の山菜やとち餅饅頭、あんぼ、行者にんにくしょうゆ漬け、栄村トマトジュース、道の駅で食べたソフトクリームなど、おいしく食べたものは数知れない。いま思えば一日中ずっと何か食べていたのではないだろうか。腹八分目どころか満腹であるのにもかかわらず、お箸が止まらない。そんな体験をしたはじめは、2日目にあんぼ作りをしたときである。

2.あんぼ作り体験

栄村での2日目、私は栄村の郷土食であるあんぼ作りを体験した。あんぼ作りの部屋に入るととてもあたたかい笑顔で「竹の子会」の方々が迎えてくださった。「竹の子会」は現在5人(この日は1人の方は都合がつかなく4人であったが)で成り立っていて、19年前から結成されているそうだ。結成当初はもっとたくさんの人数だったらしい。村の小学校に作り方を教え、一緒に作ったり、あるときは東京方面へ売りに行ったりして好評を得ているそうである。

コシヒカリの粉を熱湯で耳たぶ程度になるまでよくこねていく。手に水をつけながら作業するが、これがとっても熱い。熱すぎて上手くこねることができないし、気づくと手が粉でべとべとになっていた。しかし、「竹の子会」のみなさんは慣れた手つきでとても綺麗に手早くこねていく。こねた種をこぶし大の大きさにちぎって、その後約20分蒸す。一度蒸したものをもう一度つき直し、あんを入れてくるんでいく。あんは、大根菜を炒め味噌と塩で調理したものと、あずきあんの2種類あった(このあんはあらかじめ「竹の子会」の方が作って用意してくださっていた)。

このあんを入れてくるむのが難しい。私たちが作ったものは皮が破れて中のあんがでてきてしまい、見栄えの悪いあんぼができてしまった。その横で「竹の子会」のみなさんはとてもきれいにあんをくるんでいく。同じ材料を使って作っているのに、どうしてこんなにも見栄えが違うのだろうか。とても同じあんぼには見えない…。学生は皆必死でどうやっ

たら「竹の子会」のみなさんのように形のよいあんぼができるのか試行錯誤しながら、だんだんとコツをつかみ、最後には初めに作ったものとは比べようもないくらい、とても形のよいあんぼが完成した。

あんぼ作りをしながら、「竹の子会」のみなさんからあんぼについてのお話を伺うことができた。昔、あんぼはヒエ、ソバ、栗、トウモロコシ、栃の実、くず米を材料に用いており、臼で雑穀を粉にひき、作るのに日数がかかるため、主に農閑期に食べる事が多く、そして今よりおいしくもなかったが、他に食べるものがなかったそうだ。あるお母さんの話によると、あんぼの名前の由来を調べてみたがわからないとのこと。村のおばあちゃんやおじいちゃんに聞いてみても、「昔からあんぼと呼んでいた」と言われたそうだ。秋山郷では、あんぼのことを「あっぽ」というそうである。秋山郷に住む福原さんのお話では、昔は米があまりなかったので、朝は「あっぽ」を食べていたそうだ。栄村から帰ってきて、私もあんぼの由来を調べてみたが、わからなかった。それだけ長い年月、あんぼは村に根づいているのだろう。

あんぼを作り終え、自分たちで作ったあんぼを食べてみる事になったそのとき、気づけば目の前に色とりどりの野菜や、「竹の子会」のみなさんの手料理がたくさんあった。どれもこれもとてもおいしそうである。「竹の子会」のみなさんと学生が円をくみ、談話をしながらご馳走をいただく。トマトやトウモロコシがとっても甘い。かぼちゃなんて噛めば噛むほど、甘みがあってとてもおいしい。あんぼひとつで満腹になっていて、夕方に交流会でバーベキューが予定されているにもかかわらず、お箸が止まらない。「これも食べてみ」「こっちも食べてみて」とたくさんおもてなしをいただいた。

村で自分たちの手で作った野菜がいかにおいしいかを教えていただいたように思う。こんなにおいしいものを毎日食べることができなんてなんて幸せなのだろうとさえ思った。スーパーに行けばたくさんの種類の野菜が手に入る。しかし、スーパーに売られているものと、今回栄村でいただいたものとは味が本当に違う。スーパーで売られているものは生で食べてみるとあまり味がしない。素材そのものの味があまりないように思う。しかし、栄村で食べたものは生で食べても味があるのだ。味が“濃い”のである。

3. 栄村における地域交流

あんぼ作りを終え団欒をしているときに、紙漉きの名人でもあり、野々海の水路番でもある広瀬さんが姿を見せられた。話を聞くと、「竹の子会」のとあるお母さんと幼なじみだと

いう。「あんたもこれ食べ」「近ごろ体調はどう？」と会話が弾む。私はその光景を見ていて、地域交流がここにはあると感じた。交流会でバーベキューをしたときにも、それは感じた。村の方が集まるだけで、そこはひとつのコミュニケーションの場となるのだ。私の住んでいるところではこのようなコミュニケーションの場所はない。隣の家の人ともあいさつをかわす程度である。近所づきあいさえない。いつからこのような地域交流がなくなったのであろうと思うほどだ。

村には同じ苗字の人がたくさんいるので、名前と呼ぶことが多いという話を聞いた。村長と同じ苗字である高橋真太郎さんは皆さんから「真ちゃん」という愛称で親しまれていた。苗字でなく名前呼び合うといことも、私が住んでいるところではない。年齢や性別など関係なく、村の人びとがつながりあっていることに羨ましさを感じた。

また村の人びとは自分が住んでいる土地のことをよく知っておられるように感じた。職業柄、村のことを詳しく話せるのだろうかと思ったが、そうではなかった。村の人が皆、村のことをわかっていらっしやるのだ。ふと、私は自分の住んでいる土地のことをどれだけわかっているのだろうかと考えた。そうするとほとんどわかっていないことに気づかされたのである。

今回栄村に滞在している間に栄村のことはもちろん、村や村の方々との交流をとおして、いま自分の住んでいるところのことを見つめなおすことができたし、ふだん日常では気づかないこと（自然の大きさや、自然と人、人と人とのつながり、食物の美味しさなど）を見つめなおすことができたように思う。

おわりに

今回この国内現地プログラムで栄村と出会うことができたことは、ご縁があったからであると思う。この縁を結びつけてくださった栄村の方々、大学の方々、そして、この縁がなければ、仲良くなる機会がなかったであろう精華の学生の皆と素敵な時間を過ごせたことに心から感謝したい。今回は夏の栄村の様子しかみていないので、四季によって表情が変わる栄村にまたいつか会いに行きたいと思う。

内発的発展

—「ウィンナーコーヒー」と「コーラ」な発展—

204K010 石川 寛

1.はじめに

今回のプログラムは 2 度目の栄村訪問であった。宿舎にバスが到着した瞬間、すごく懐かしい空気に包まれた。これは 2 度目だという理由だけによるものではない。初めて栄村を訪れたときも、村の中を流れる千曲川、日本二百名山である鳥甲山、優しい地元の方々、そのすべてが初めて触れるものであり、お会いする方々であったにもかかわらず、私は初めて来た土地に対する不安を感じなかった。その不安を薄れさせるくらいにあたたかい懐かしさのようなものを感じていたのだ。もしかすると私は、栄村がもつ独特の雰囲気を感じとっていたからかもしれない。この独特の雰囲気をつくりだしている要因とはいったいどのようなものなのか。もう一度栄村でのよき体験を思い出しつつ、考えてみようと思う。

2.過疎に対する考え

私は栄村のほかにも、同じ長野県の佐久市望月町、島根県津和野、岡山県高梁市などの中山間地と呼ばれる村や町を訪れてきた。そのどこもが過疎化という悩みを抱え、高齢化の問題に歯止めをかけられずにいた。なぜ過疎がおきるのか。私はその疑問を抱きながらこれらの村を訪れたわけだが、けっしてこの村や町に魅力がないというわけではない。栄村には鳥甲山に代表される四季折々でちがう顔を見せる大自然、望月町には住民主体の地域活性を目的とした団体がつくるさまざまな特産品、津和野や高梁にも都市では考えられない住民同士のつながりがある。なぜ、都市にはないこれだけの魅力を持ちながら、過疎が進み、都会へと人が流出してしまうのだろうか。これが私の研究テーマである。過疎とはいったい何が原因なのか。これは私個人では到底答えにたどり着くことのできない問いなのかもしれない。しかしながら、答えにたどり着けないからといって放置して許される問題でもない。そこで、私なりにその原因について考えるところを、栄村のことをふまえて書こうと思う。

全国各地でおこる市町村合併の波を栄村は拒否し、合併に頼らず独自で発展する道を選んだ。これは比較的有名な話である。それだけ栄村は自律というものを一人ひとりが意識

しているのだなと私は感じていた。一方、栄村から南に位置する望月町では、同じく合併という話が持ち上がり、反対の声があがりはしたが、結局は隣の佐久市と合併してしまった。このとき合併賛成派と戦った望月町の元町長だった吉川徹さんにお話をうかがうことができた。

「望月は住民が主体となって合併を阻止しようとしたが、住民の意思が統一できずに結果的に合併に賛成することになってしまった。栄村はその逆で、住民がひとつになり合併と戦い、自律という道を勝ち取った」

(2006年8月1日 旧望月町元町長吉川徹さん 聞き取り)

他の町の人でさえ感心してしまう。それだけ栄村の人たちが、自分たちで考え、自分たちが主体となって発展していこうという気持ちが高かったのだろう。それを吉川さんは絶賛していた。自分たちが主体となり、自分たちの土地の魅力を磨くことで発展していこうとする考えを、私は「内発的発展」と呼んでいる。これは滋賀大学の元学長である宮本憲一さんからお話を伺ったときに聞かせていただいたお話の中にあつた言葉であり、宮本さんは強く、この言葉を強調されておられた。その強い思いをほんの少しでも引き継ぎたくて同じ言葉を使わせていただくことにした。

私は、この周りの人たちまですごいと思ってしまうこの栄村独自のやり方の中に、私を感じる独特の懐かしさのようなものをつくりだしている「素」となるなにかがあるのではないかと考えた。

3.人のつながり

「栄村独自のやり方の中に素となるなにかがあるのでは」と述べたが、私はその「なにか」とは人のつながりという力ではないかと考えた。栄村の代表的な取り組みでもある「道直し」においても、設計図など書かずに、地元村民の方たちが自分たちの意見を出し合い、自分たちの手で道を直すそうだ。そのことについて、今回のプログラムにも同行して下さった先輩の渡邊加奈子さんの論文にも、「道直し」には、むらに昔からあつた住民同士で話し合つて決めるという「自治」の精神が息づいている、と書かれている(渡邊加奈子 『“むら”の生きる道』 2005年)。いま思うと、私が実際に歩いた道の中に、道直し事業として手作業で直された道があつたのかもしれない。そうやって住民同士が話し合つて決めるとい

うことは都市では考えられないことである。私を感じた懐かしさというのは、栄村のいたるところに村民の手が入っていることから生まれるあたたかみゆえのものではないだろうか。それは都市のアスファルトの道路には感じられないものである。

また、今回のプログラム中に、さまざまな村民の方とお会いし、貴重な話を聞けたと思う。その中でもっともよかったと思うのは、やはり2日目の夜にあった村民の方々が開いてくださったバーベキューだと思う。以前、松尾先生から、村民の方が集まって酒を飲みながら喧嘩かと思うくらい激しい議論をしているという話を聞いていたので、この交流の席もそのように激しい議論になったらどうしようかなどと考えていたのだが、そんな不安など吹き飛ばし、食べることに集中できるくらい、みなさんに良くしてもらったと思う。数年前までは、まさか自分が長野県のとある村の方々と楽しく話しながら酒の飲み交わすことなどまったく想像できなかったことだ。この私と栄村とのつながりのきっかけをくれたのが松尾先生である。そして今回のプログラムのメンバーと私をつないでくれたのが栄村と村民の方々である。

人はきっかけさえあれば思ったより簡単につながることができるのではないか。そのつながりに距離などは関係ない。つながるのに必要なのはきっかけだけだと思う。そのほかは必要ない。かっこつける必要などまったくない。誰でも簡単につながることができるのだ。「なんとしてでも米作りをするんだ」という、米作りから生まれた「協力する」という考えが村民の中で生きているからこそ、栄村では今でも村民同士でつながっていられるのだと私は思う。私が思うつながりの力とは、なにかをしようとする思いがひとつに集まったものだと思う。栄村は米作り、望月町は次の世代に町の魅力を残すために。これらの思いを住民が思うことでひとつになり、つながりとなって私たちを惹きつけるのだと思う。そのようなつながりに触れたからこそ、ほとんど初対面であったプログラムのメンバーとつながることができたのではないだろうか。

4.内発的発展とは

プログラム3日目にあった溪流釣りでのことである。釣りのポイントまで講師の相沢和薫さんの車で移動したのだが、その移動中の車内で大変興味深いお話を聞くことができた。

「テンカラ釣りとはフライフィッシングの違いは、お客さんに出す飲み物と同じだ。たとえばお客にコーヒーを出して、はじめは喜ばれるが次第に飽きられてしまう。ここでコーヒーをやめてコーラに変えてしまうのがフライフィッシング。コーヒーそのものは変えず、砂糖を増やしたり、ウィンナーコーヒーにしてみたりと変化を加えてみる。これがテンカラ釣りの考え方である。岩魚に疑似餌が気に入ってもらえないなら、フライフィッシングのように疑似餌そのものを変えるのではなくて、疑似餌は変えず、竿さばきで溺れている虫の動きを加えて岩魚を釣り上げる。これがテンカラ釣りの良さだ」

(2006年8月29日 相沢和薫さん 聞き取り)

簡単にいえば、興味が失われてしまったものを、すぐに別の新しいものへと変えてしまうのではなくて、興味が失われたものに少し変化を与えることで、ふたたび新鮮さを取り戻すという考え方なのだろう。これこそが私のいう「内発的発展」でもある。栄村にもともとある良さを潰して、よそから持ってきたものを取り入れるのではなくて、村にもとからあるものの良さの中にまだ隠れている部分を住民が最大限にまで引き出すことが、過疎問題の解決に必要なキーワードなのではないだろうか。

栄村が行っているものの中には、他にも内発的発展の考えを組むものがある。それは渡邊加奈子さんの論文にも書かれている「田直し」などである。住民が主体となり（主体にならざるをえなかったというもあるが）住民同士が力を合わせ、自分たちの住むところは自分たちの手で良くしていこうという住民自治が、先ほどの相沢さんのお話にも出てきた潜在的な良さを引き出されたコーラだととえるのならば、私が思うコーラとは、都市と同じように発展していくことである。便利になることはよいことだとは思いますが、それでは村のもともとのよさがなくなってしまうような気がする。

ここで私は新しい考え方は生まれぬものかと考えた。村にもともとある良いものをさらに磨いていくのが「ウィンナーコーヒー」的発展。飽きられたら別のものに変えてしまうのが「コーラ」的発展。この二つの考え方をあわせることができないだろうか。たとえば、住民からすれば普段からあって当たり前のものであっても、外部の人たちにすれば珍しく思うものを観光ツアーなどで栄村まで見に来るといったものである。村にある住民が気づいていない良さを外部の人間が気づかせ、それを観光資源にする。十分ありえる話ではないだろうか。しかしながら、必ずしもこの方法が成功するとは限らない。ひとつの可能性として、私はこういうのもあるのではないかという道を示してみたいにすぎない。

さいごに

栄村というすばらしい魅力をもった村を訪れるきっかけをくれた松尾先生、色々なお世話をしてくださった鈴木さんや村の方たち、そして渡邊さんに心から感謝しておきたい。そして普段の生活の中ではけっしてつながることのなかった学生の仲間たちに、今回のプログラムで出会えたことにもお礼を言いたい。本当にありがとうございました。

参考資料

- ・ 渡邊加奈子（2005）『むらの生きる道——栄村の「むらづくり」に見る“暮らし革命”の萌え芽』、京都精華大学人文学部学生論文報告書シリーズ
- ・ 古川彰他（2003）『観光と環境の社会学』、新曜社
- ・ 高橋彦芳（2003）『田舎村長人生記』、本の泉社
- ・ 福島ゆかり（2006）「自律をめざす長野県栄村：その暮らしと自治——中山間地域農村の持続可能化のために」（京都精華大学大学院人文学研究科 2005 年度修士論文集）

心が豊かになる栄村

203K007 東 西岐子

はじめに

二度目の栄村。一度目の訪問の際は、ゴールデンウィークなのにまだ雪が残っていて、そのうえ、桜も咲いているという風景に感激を覚えた。私はほとんど雪の降らない地域で育ってきたからである。一般的に言われる日本の四季しか私の概念になかった。そのため、雪と桜という情景は大変美しく見えたのだった。

そして、今回の訪問でもまた私は驚かされることになった。真夏だった京都から栄村へ着くと、少し涼しいなと感じた。やはり、少し秋が訪れているのだろうか。コスモス街道にはコスモスが咲きみだれていた。やはり秋がもう訪れているのだろうかと思った。ここの夏は短いのだろうかなんて思いふけていたら、なんと民家の庭にはアジサイが咲いているのである。ここは秋なのか！いや、初夏なのか…？ 植物が好きな私の頭の中はずっと混乱したままだった。

「みどり豊かな心のやすらぐ村」。この言葉どおり、栄村にはみどりがたくさんある。右を見ても左を見ても緑である。そして、それぞれの家庭には必ずといっていいほど花が植えられ、それぞれが美しく咲いていた。緑が多いからだろうか、私の気持ちは京都にいる時のようなイライラした気分ではなく、徐々に穏やかな気持ちになっていった。

1. 私の目に映る田舎

私は、田舎と呼ばれる土地が好きである。私は奈良県奈良市の中でも新興住宅地で生まれ育った。自然と呼べる自然が身近にあるわけでもなく、同じような住宅に囲まれた生活であった。しかし、わが家庭は自然が大好きだったので、毎週末のように近くの山や川へ行き、自然の中で遊んでいた。そして、そのような幼少期を過ごす中で、次第に自然に囲まれている中で生活したいという気持ちが芽生えはじめた。

そして、もうひとつ、田舎といわれる地域への憧れを抱く理由として、「近所づきあい」というものがある。その地域のお互いが何者で誰が何をしているかを知っている。町なかで会ってもフランクに笑える関係。年齢性別関係なく、気兼ねなく仲良しの関係。そういうものに憧れた。やはり私の育った地域ではありえないこと。隣が誰で、向いが誰か分か

ってない。いま現在暮らしている京都の下宿でも、会釈程度である。おばあちゃんやおっちゃんに生活の知恵や気をつけることなど学ぶべきことを学びたいと思った。高校の親友は、そういう田舎に生まれ育った人だったので、私はいまだにその地域に遊びに行く。そしてのびのび暮らす友だちをうらやましく思うのだ。嫉妬心ともいえるだろうか。

今回栄村での交流会の時、同じような嫉妬心とうらやましいという気持ちが私の心の中に再び現れはじめた。

「この村人の気さくさはいったいなんなんだ？」

「村人同士が下の名前で呼び合う??」

「みんなめっちゃ笑顔やん」

そんな村人たちに囲まれていたら、人見知りの私も無意識に笑顔になってしまった。なんと素敵な空間なのだろう。どう表現したらいいのかわからないが、ものすごくドキドキした。

そんな村人たちが作った野菜。私が栄村で食べたトマト、きゅうり、とうもろこし、なすなど、どれも食べたことがないほどおいしく、色もはっきりとした美しいものであった。おいしすぎて肉よりも野菜ばかりを食べていたぐらいだった。そして道の駅で売られていた野菜の値段も京都では考えられないほど安かった。私は京都で一人暮らしをしているため、よくスーパーへ買い物に行く。しかし、どの野菜もなんだか少ししおれているし、食べてもそこまでおいしいとは感じない。なにか味付けをしなければ満足しない。野菜本来の「味が無い」。そのうえ、京都で買う野菜の値段は驚くほどに高い。そして、過剰包装である。おいしくないのに高い値段を払わなければならないという日本の状況に本当に疑問をもってしまう。

水が美しく、自然があふれている土地に住む人は自然と顔がほころび、心が豊かになる。すると心が優しくなって、何もかもが身近になる、そう確信した。

2. 心地よい不便さ

将来、栄村のような、農村地域に住んでみたい。もちろん、その地域で子どもを生み、育て、田を耕し、雪かきをし…。でも、実際には難しいだろう。仕事もなければ、知識もない。何も身に付けていない私は生活していけないだろう。理想と現実には大きな溝がある。でも、この思いは捨てきれない。

そして、農村地域に足を踏み入れたことのない人に、ぜひ栄村へ足を運び、少しの間生

活をしてみてほしい。不便に感じる場所もおおいにあると思う。しかし、その不便がなんともいえない心地よさになると思う。水道から出てくる水が冷たくて気持ちいいことや、もんぺをはいて手ぬぐいを頭にまいたおばあちゃんの姿に心打たれ、私のようにもんぺを買ってしまうのではないだろうか。不便さは、じつは心にゆとりをもたらしてくれると思う。

おわりに

栄村を教えてくれた松尾さんに本当に感謝する。そして、今後も引き続き栄村へ足を運びたいと切に願う。

栄村といふところ

203K106 野村聖

はじめに

ゴールデンウィークに栄村を訪れていた東さんや板倉先生から栄村の話を知っていたので、今回、栄村に行くことを楽しみにしていた。写真を見せてもらったが、5月なのに一面雪で真っ白でありながらも桜が咲いているという変な風景が印象に残っている。今回訪れた夏の栄村と比較すると、同じ場所だという実感がいまひとつわからなかったが、写真で見た場所に自分も来ているということがなんだか嬉しかった。

1. 栄村の気候・地理的環境・食べ物

栄村が日本の最高積雪記録をもつ豪雪地帯ということは聞いていたが、それを実感したのはやはり現地に行ってからだった。まず、バスの窓から集落を眺めているとおもしろいことに気づいた。どの家も車庫が丸いのだ。屋根の形が丸みを帯びていて、正面から見ると上部が半円なのだ。京都では見られない光景なので珍しく、半円というのがおもしろく飽きない光景だった。はじめは、それがなぜなのかわからなかったが、雪という理由を聞いて、気づかなかった自分がかっこよかった。車庫に比べ、母屋はたいてい普通の屋根だったが、やはり傾斜のきつい家が多かった。

また、池のようなものがある家が多いなと思って眺めていたら、後で「たね」という雪を融かす場所だということを知ってもらった。それ以外に防災などにも使えるんだろうなと思い、生活の知恵に感心した。

その他にも、冬になると村の職員が取り外してまわると聞いたガードレールのことや、一般よりも夏休みが短く冬休みが長い学校の話。そんなところからも冬の雪が栄村の生活に大きく関係していることが感じられた。地理的環境は、その土地の文化や生活、そして人に大きく関わっている。もちろん8月に雪はないので想像するだけだが、この地が冬になるとどんな状態になるのか。冬にも行ってみたい。

また、村の高低差が激しい。大きな千曲川が谷の底を流れていて、集落があって、野々海のような高い山々がある。ブナ林が存在するというのも栄村の環境を示すよい指標だと思う。ブナは標高が高い地域にしか生えない。それが車も通る道路の横に林が広がって

なのだ。このような栄村の自然環境はすばらしいと思う。緑が深くて、風景を見ているだけでも気持ちよかった。

また、バーベキューのとき食べた野菜が非常においしくて感動してしまった。トウモロコシ、とても甘かった。キュウリ、いくらでも食べられた。ナス、あんなおいしいナスは初めて食べた。

私にとって、スーパーで買うものより、実家から送られてくる野菜のほうがおいしいのは当たり前だった。家族が作った野菜のほうが、作った人の顔がわかっていて、作られた土地への愛着もある。嘉田先生が言う「心的距離」が近いからだ。しかし、村の野菜のほうが美味しいと感じたことが、少し不思議だった。

お土産で買ってきたキュウリとシメジも、帰ってから食べたが、やっぱりおいしかった。

2. 野々海の歴史と風景

野々海池に行くときに通った水内地区が、農耕地が少なく水の便が悪いため、米の収穫量が少なかったというのは、今日、私たちが見た水田の様子からは簡単には信じられない。戦後の人口増や、もっと米を食べたいという村民の願いから、山の上の池から水路を集落に引くという大事業が始まった。もともと、それまでにはこの計画は幾度か頓挫したという。

水路班には参加していないので、あの山のとっぺんにあるような野々海池から集落の田んぼまでどのように水路がつながっているのかは資料の地図からしかわからない。だが、現代のような機械がない時代に全部人の力で、このような大きな事業を成し遂げたというのは村の大きな歴史だろう。国営事業といっても、集落から3時間ほどかかるこの池まで、土や資材を運び、土を選別し堤をかためる。という作業がどれほど過酷なものかはわからない。冬は雪が積もるため、作業はできない。この事業を計画した人、事業に従事した村人、みんなすごいとしか言いようがない。人間の力はすごいと改めて思った。昔の人は何でも自分の力でやってきたのだと思ったが、昔の人といっても戦後、昭和20年代のことで、水番小屋の広瀬進さんも高校生のころ働いていたのだから、それほど大昔ではない。そういうことも含め、村の歴史がちゃんと現代に受け継がれている、それを実感できることをすごいと思う。都市部ではそういったことは少ないからだ。

実際、さわやかな風が吹く高原地帯で、水番小屋の場所からの風景は、湖のほとりにいるような感じで美しいものだった。三角屋根の水番小屋には電気も水道も通ってないそう

だが、ここではまた違った豊かな生活ができそうだ。

バスでの移動が多かったが、車窓風景では多くの田んぼを目にした。栄村も日本の中山間地域に漏れず、過疎化・高齢化が進んでいる。いったい、あの多くの田んぼは誰がやっているんだろうと思わずにはいられなかった。やっぱりおじいちゃんおばあちゃんばかりなのだろうか、と思った。

3. 秋山の木工文化

3日目、私は木工班のコースを体験し、そばやあんぼを作るときに使う木鉢などの木工品をつくっておられる山田庄平さんにお話を聞いた。山田さんの家は、実際に住んでおられる家そのものが秋山民俗資料館になっていて、山田家にあった昔からの生活用品やお祖父さんの日記がとて多く展示されている。その膨大な展示品も一つ一つ丁寧に説明してもらった。

木工の話も、まるで孫に話すように説明していただいた。山田さんに頼んで、実際に木鉢を削るところを見せてもらうこともできた。大きな彫刻刀のような道具を使い、一抱えほどもある木鉢を、山田さんは2~3日でひとつ仕上げるといふ。日本で一番大きい木鉢も見せてもらった。ほかにも、さまざまな種類の木を使い、まな板や碁盤、民芸品などをつくっておられる。山田さんはけっこうお年を召しておられるが、まだまだ現役である。この村では当たり前なのだろう。本業は建具師なので、この木工品作りは冬の間の副業である。「こんな“いたずら”もしている」と言っ、て、いろんな木工品を見せてくださった。なかでも、秋田の温泉で見かけたらしいお土産のまねをした、木板に人生教訓のようなものを書いた“いたずら”がかわいかった。民俗資料館も十分見ごたえがあったが、2階はプロの画家である息子さんの絵のギャラリーになっていて、そちらも観賞することができた。そこで、秋山郷の歴史や、戦前の道路を通した話、朝鮮からの労働者が来ていたこと、都市部の中学生との交流など、なんだか深くなっていく話までしていただき、ありがたかった。

4. 栄村の人々

紙漉きを指導していただいた広瀬進さんも、秋山郷で説明をしてくださった福原照一さんも、木工の話をしてくださった山田庄平さんも、みんな村の歴史や文化に詳しかった。職業柄かもしれないが、当たり前のように私たちに話してくれる様子から、普通の人がこ

のように自分の住んでいる土地のことをこれほど詳しく知っているものだろうかと思心した。自分の地元の比べ、田舎ということに対する卑屈さがあまりないように思えた。だから、よそ者に対する目がなかったように感じた。みんなあたたかく歓迎してくれた。鈴木敏彦さんをはじめ、体験プログラムの先生方など、多くの方にお世話になった。とくにバーベキューの時は、村の人が焼き役に徹してくれていて、私たちはほとんど食べるだけだった。その村の人たちは名前も知らないので申し訳ないと思う。ありがとうございました。

初日の夜に、高橋真太郎さんに講義していただいたので、栄村の取り組みについても少し詳しく知ることができた。今回のプログラムでは、栄村がどういうところか知ることが第一だったと思うが、栄村の掲げている「自律するむら」ということをもっと勉強できたらと思った。村の人たちは日頃、その「自律」を考えているのだろうか。触れ合った村の人たちはあまり田舎という卑屈なところがなかった。むしろ、自分の村を誇りにしているような気持ちが感じられた。

私たちのような短期間に栄村を訪れ去って行く者と、栄村に住んでいる人たちとは、村の印象は違うと思う。通り過ぎる者とその地に根づいている者では、見えるものも違う。住むというのは極端だが、今回のような研修や、農泊やグリーンツーリズムなど、これからの村との接点は考えられる。

総じて、栄村はよいところであった。今回のプログラムは、「栄村がどんなところか知る」ということが一番しっくりくる内容だったと思う。

気分と視線が上がる村

203G153 諸星 隆史

はじめに

栄村滞在中のプログラム 2 日目午後 A 班【青倉地区の水路を探る】で講師・案内役をして頂いた広瀬明彦氏（栄村青倉水路委員）の水路探索中の生き活きとした笑顔や、プログラム 3 日目午後 A 班【岩魚溪流釣り体験】で講師・案内役をして頂いた相沢和薫氏（栄村振興公社・のよさの里支配人）の岩魚釣りを教えて下さっている時の真剣な表情など、栄村の方々の生き活きとした笑顔や真剣な表情と接しているうちに、私も自然と笑顔になったり真剣な表情になったりしていったと思います。明るくはきはきとした声も印象深いです。健康の秘訣はどこにあるのでしょうか。

1. 栄村の食の豊かさ

初めていただいた郷土食「あんぼ」、行者にんにく、岩魚の塩焼き、美味しい日本酒、もう一度口にしたいです。真っ赤で味の濃いトマト、甘いお米、水臭くないキュウリ等、綺麗な水と空気で育った農作物は美味しいのだと気づきました。日頃私が食べている野菜は、スーパーマーケットで購入してマヨネーズやドレッシングを和えてサラダとして食べることや、汁物の具・鍋の具として食べる事が多く、野菜そのものをそのまま食べることはあまりありません。プログラム 2 日目夜【地元村民との交流会】として青倉地区公民館で行われた宴会で振舞って頂いた新鮮なトマトは、そのまま口にすると口の中いっぱいトマトの香りが広がり、果実を食べる感覚で頂きました。そのままジュースにしても美味しいトマトは、いつも食べているトマトと比較してみると、やはり味が濃いと感じました。栄村滞在 2 日目昼に行った「中条温泉トマトの国」にあった自動販売機で購入したトマトジュースには果汁 100%と表記されていて、原材料名にはトマト、食塩としかありません。

普段食べているお米では、「お米だけで食べたい」と思うことはありませんが、栄村では「お米だけでも食べたい」と思いました。栄村滞在 1 日目の夜に行った「旅館吉楽」での家庭の食卓にお呼ばれしたかのような雰囲気の中で頂いたお米は、格別に美味しかったです。

また、同じ山菜料理でも、土が違くと味も香りもあんなに美味しくなるのでしょうか。私がたまに外食している立ち食い蕎麦屋の山菜蕎麦の山菜は、あまり歯応えがなく、味自

体も香りも蕎麦の出汁に負けていて、山菜蕎麦を食べているにもかかわらず、ワラビやゼンマイといった具体的な山菜を意識することなく食べていました。栄村滞在中ずっと私達をサポートして下さった鈴木敏彦氏（栄村村議会委員）の案内で3日目の昼に訪れた「秋山木工」2階で頂いた「山菜定食」はまさに山菜がメインの定食であり、山菜とはこんなに美味しいものなのだと知るとともに、具体的な山菜名を覚えて帰りたいと思う程でした。

農業のことをほとんど何も知らない私でも、栄村で食べた農作物は日頃食べている農作物と味も香りも違うということぐらひは分かりました。逆にいえばその程度しか分からなかったのですが、栄村の農作物は美味しいという印象は強く残っています。

2. 見上げるは山と空

見渡せないほどの雄大な山々に圧倒され、思わず歓声を上げてしまいました。鳥甲山、苗場山、妙高山、岩管山、鳥帽子岳、笹法師山、赤倉山、佐武流山、大岩山、横手山、笹ヶ岳、浅間山、白砂山、堂岩山、八十三山、大倉山、八間山、北アルプス連峰、南アルプス連山と、本当に多くの山々を眺めることのできる日本有数の山間地域であると思います。とくに栄村で一番高い山とされる佐武流山には上信越高原国立公園・森林生態系保護地域があり、登山道もあるようなのでいつか登山を挑戦してみたいです。空の青と雲の白とのコントラストにも心を惹かれました。

ふだんの生活では空を見上げることなどめったにないのですが、栄村ではよく空を見上げていました。日常生活を送っている時は時間に追われることが多く、人込みの中を単に目的地にむかって足早に歩くので、空を見上げるどころか、周りの景色を楽しむ余裕すらないこともあります。栄村の空も京都府の空も同じ空であることに変わりはないのですが、不思議と空が大きく感じました。高層ビルや大きな立て看板等に視界を妨げられ、自動車や自転車等に注意しながら歩かないと危険である状況が当たり前であるため、めったに空を見上げることがないのだと思います。雨音による目覚めの朝も雨音が心地良く、贅沢なほどの静寂さが、私にとっては感慨深かったです。

おわりに

このような環境の良さが健康の秘訣なのではないかと感じました。いつまでもこの環境の良さであって欲しいと願うとともに、いつまでも元気な栄村の方々でいて下さい。また訪れたいと強く思っています。